

プロジェクト研究4

卒業後の生活につながる授業の在り方 ーキャリア教育の視点を取り入れてー

県立大淀養護学校教諭 菊川 勉 特別支援教育係長 中井 和代
Kikugawa Tsutomu Nakai Kazuyo

県立大淀養護学校教諭 平井 文章 研究指導主事 森 由香
Hirai Fumiaki Mori Yuka

県立奈良西養護学校教諭 大塚 直裕 研究指導主事 佐々木 幸充
Otsuka Naohiro Sasaki Yukimitsu

要 旨

特別支援教育におけるキャリア教育への関心の高まりを背景に、知的障害特別支援学校でキャリア教育の視点を取り入れて授業改善を図り、卒業後の生活につながる授業の在り方を研究した。その結果、生徒のより主体的な活動が引き出されたり、小学部、中学部、高等部の学部間連携の方向性が示されたりするなど、更に充実した教育を目指すに当たってキャリア教育の視点は重要であることが明らかになった。

キーワード： 主体性、授業改善、現場実習、作業学習、学部間連携

1 はじめに

(1) 研究の背景

平成21年3月に告示された特別支援学校学習指導要領の改訂の基本的考え方の一つに「自立と社会参加を推進するため、職業教育等を充実」が挙げられ、主な改善事項として、知的障害特別支援学校において高等部専門教科に「福祉」が新設されるとともに地域や産業界等と連携した職業教育や進路指導の充実を図ることが規定された。

この改訂を受けて、全国の特別支援学校において、キャリア教育、進路指導、職業教育への関心が高まった。この高まりは、全国特別支援学校長会 全国特別支援学校実態調査（H22）における全国知的障害特別支援学校長会加盟校「本校の特色及び本年度の課題」、「研究指定」欄Keyword分析結果からもうかがえる（図1）。本県においても、平成24年度「奈良県特別支援学校 知的障害教育校研究部連絡会」^{*1}で平成25年度に取り組みたい校内研究テーマのキーワードとして「キャリア教育」及び「進路指導」が県内6校中5校から挙げられ、関心の高まりが見られた。

このようなキャリア教育への関心の高まりは学習指導要領の改訂に伴うものであるが、それ以外にも、二つのことが言えるのではないかと思う。一つは、作業などを活動の中心にし

*1 奈良県知的障害特別支援学校で校内研修や校内研究の企画などを実施する校務分掌担当者で組織している連絡会である。

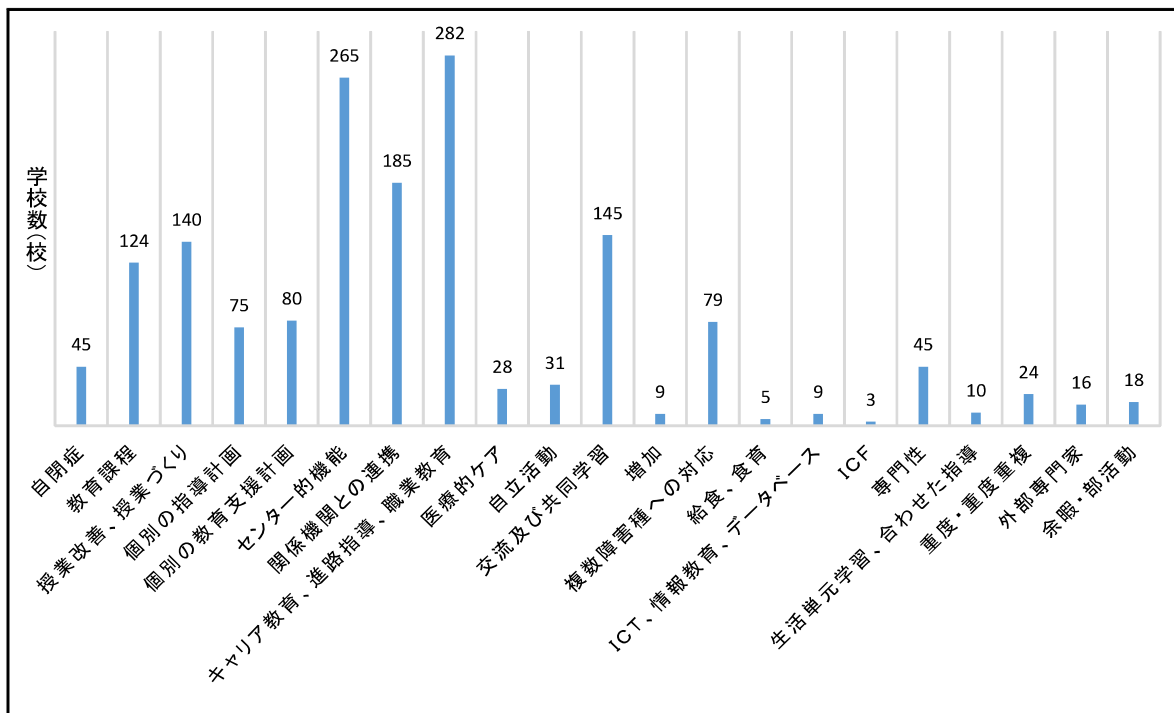


図1 「本校の特色及び本年度の課題」、「研究指定」欄のKeyword分析結果

※独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 研究成果報告書（平成24年3月）より作成

た授業や、産業現場等における実習（以下「現場実習」という。）など、卒業後の生活を見据えた取組を更に改善したり、見直しを図ったりする動向であるということ。もう一つは、「高等部だけではなく、小学部、中学部も含め、全ての学部においてキャリア教育の視点が必要である。」とされた結果ではないかということである。

一方、キャリア教育研修講座アンケート結果^{*2}①では、キャリア教育が「必要である」及び「どちらかと言えば必要である」を合わせた回答が99%、これに対し、キャリア教育の取組が「進んでいない」及び「どちらかと言えば進んでいない」を合わせた回答が57%であった。つまり、キャリア教育の必要性は認知しているが、具体的取組として実施されている学校は少ないという結果であった（図2）。このようにキャリア教育の具体的取組については、まだまだ進んでおらず、研究を進め具体的実践の在り方を探り、実践の充実を図る必要がある。

また、キャリア教育研修講座アンケート結果②では、小学部、中学部、高等部のそれぞれの学部で系統性のある授業内容の検討や小学部、中学部、高等部の学部間の連携について、「進んでいない」及び「どちらかと言えば進んでいない」を合わせて71%の回答であった（図3）。つまり、卒業後の生活を見据えた系統性のある授業及びそのための引継ぎや学部間連携が十分になされていないという課題が明らかになった。

本県知的障害特別支援学校高等部においては、現場実習や職場見学及び卒業後の生活へのつながりを意識した授業などが行われており、これらの教育活動が卒業後の生活につながっ

*2 平成25年8月に県立教育研究所で開講した「特別支援教育におけるキャリア教育研修講座」を受講した県内特別支援学校教職員97名に実施したアンケート結果、回収率は97%

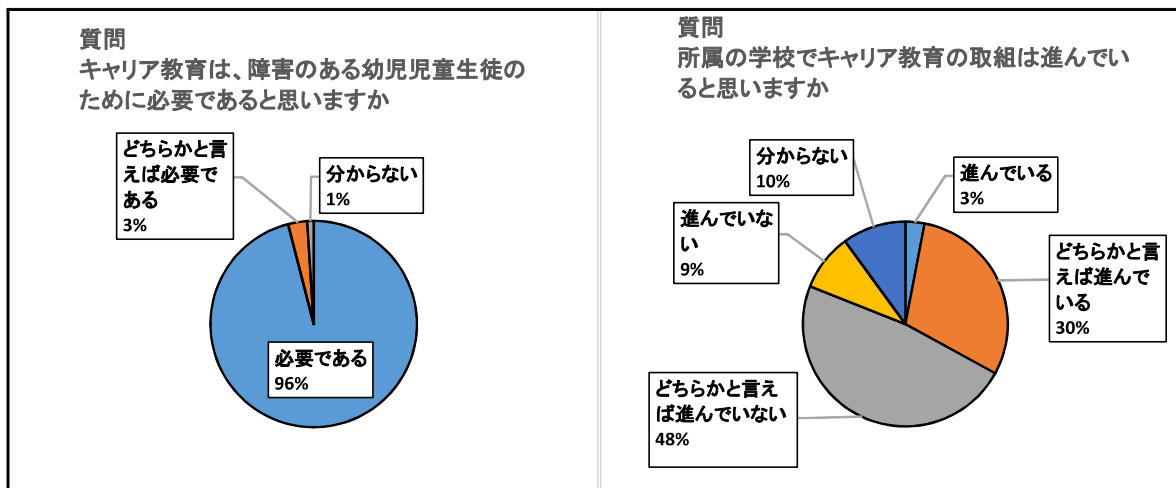


図2 キャリア教育研修講座アンケート結果①

ているのかということについて、常に再確認をしなければならない。また、卒業後の生活とのつながりを意識した実践について研修などを実施し、更に充実した実践の研究が進んでいるかと言えば、まだまだ改善の余地があると思われる。小学部、中学部においても一つ一つの授業や日々の教育活動が将来にどうつながっているのか、「なぜ」「なんのため」の教育活動なのかについて、常に問い直し、そして、

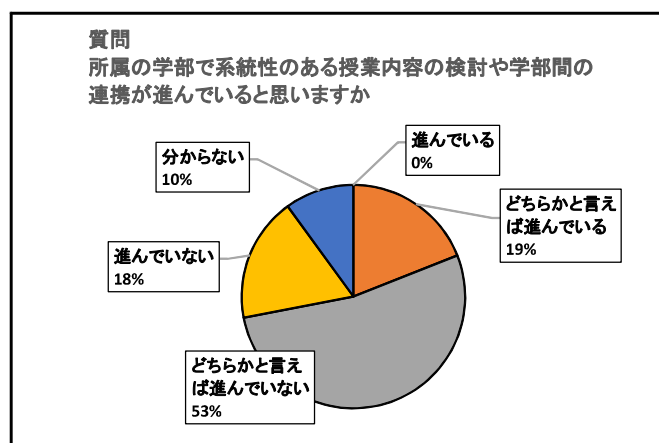


図3 キャリア教育研修講座アンケート②

次の学部へつないでいかなければならない。「進路指導」及び「キャリア教育」への関心が高まっている今、これらの課題に対して取組を進めていく必要があると考えている。

(2) 研究仮説

上述の背景及び現状から、学部間の連携を踏まえた卒業後の生活につながる授業の在り方及び知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の具体的実践の在り方を課題として捉えた。そこで、研究仮説を「授業にキャリア教育の視点を取り入れることで、授業改善が図られ、卒業後の生活につながる授業の在り方が明確になる。」とした。

(3) キャリア教育について

中央教育審議会（答申、平成23年1月31日）「今後におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の中で、「キャリア教育の必要性や意義の理解は、学校教育の中で高まってきており、実際の成果も徐々に上がっている。しかしながら、『新しい教育活動を指すものではない』としてきたことにより、従来の教育活動のままでよいと誤解されたり、『体験活動が重要』という側面のみを捉えて、職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりする傾向が指摘されるなど、一人一人の教職員の受け止め方や実践の内

容・水準には、ばらつきのあることも課題としてうかがえる。」と分析され、この課題を踏まえて、本答申でキャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と新たに定義された。

本県特別支援学校においても答申で示されている課題が同様に見られ、キャリア教育の受け止め方にばらつきがある。キャリア教育研修講座アンケート結果③で、キャリア教育という言葉から受けるイメージについて、その回答を受講前と受講後とを比較した。すると、受講前は「進路指導・職業教育」と答えた教職員が約29%だったのに対し、受講後は6%となりその割合が著しく減少した。また、「幼児児童生徒の主体性を育む教育」、「幼小中高のつながりのある教育」、「授業の改善や教育課程の改善につながる教育」の3つの回答を合わせて比較すると、受講前は32%だったが受講後は55%に増加した（図4）。

このアンケートは、研修講座を受講した教職員による回答であることを鑑みると、学校現場全体では、研修を受講される前の状態であることが予測され、キャリア教育という言葉か

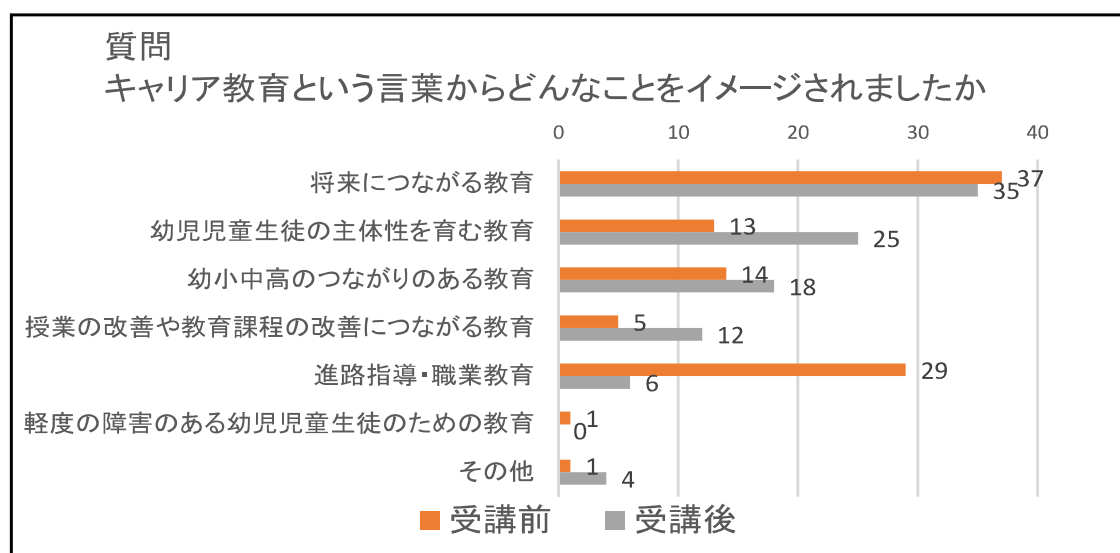


図4 キャリア教育研修講座アンケート結果③

ら受けるイメージは、「進路指導・職業教育」が多くを占めるのではないと思われる。「進路指導・職業教育」がキャリア教育の中核であることは間違いないが、キャリア教育の正しい理解が広がっていないことも事実である。

このため、特別支援教育におけるキャリア教育の先行研究や文献などに明文化されていることを参考にし、本研究を進めた。

特別支援教育におけるキャリア教育について菊地は、「児童生徒一人一人が学習上、生活上経験する様々なもの・ことに対して本人なりに『意味付け』『価値付け』『方向付け』ができるように支援し、その積み重ねや発達を大切にする教育のこと」（菊地、2012）、「教師自身が行う一つ一つの授業に対して、『なぜ』『なんのため』『なにを』『どのように』について問い直し、明確にした上で確かにつなぐ教育」（菊地、2014）としている。また、キャリア発達を促す授業については、「子どもが『やりたい』『わかる』『できる』『やった』と思える主体的に取り組む授業であり、そのような授業を学校全体で組織的につなぐことが求められます。」（菊地、2013）と述べている。

本研究においては、上記答申及び関連する文献などを踏まえ、「今実践している授業について、『なぜ』『なんのために』行い、『なにを』『どのように』教えていくのかを問い直し、『卒業後につなぐ』こと」を取組の方針として進めた。

2 研究の目的

知的障害特別支援学校においてキャリア教育の視点を取り入れて授業改善を図り、卒業後の生活につながる授業の在り方を探る。

3 研究の方法

県内知的障害特別支援学校2校において、以下の方法で研究を進める。

- ①キャリア教育の視点を取り入れた授業改善を図る。
- ②卒業後の生活と授業をつなぐ方策を探る。

4 研究内容

(1) 大淀養護学校の取組

ア はじめに

本校では「ひとりだち（社会参加と自立）をめざして」を学校統一テーマとして、研究部が中心となり小学部、中学部、高等部において研究・研修を進めている。小学部では「児童が動く・わかる授業づくり」、中学部では「将来を見据えた授業づくり」、高等部では「卒業後の生活につながる授業づくり」について研究を深めてきた。しかし、実践における学部間連携や系統性のある学習内容の検討や実施という面では十分とは言えず、課題の一つとなっている。

一方、校内で教育課程の在り方を検討するために組織立てられている教育課程委員会においては、「卒業後の生活を見据えた12年間の実践」について教職員全体で考える機会が必要ではないかとの意見が昨年度から高まってきていた。5月には、教務部、研究部、進路指導部で合同研修を企画した。進路部が中心となり卒業生の進路先やそこでの生活の様子を紹介し、研究部が中心となり卒業後の社会参加のイメージを膨らませ、現在の実践を振り返る場面ももった。その中で「卒業後を見据えて大切にしたい取組」などについて出された意見をまとめると以下の3点に集約された（表1）。

表1 「卒業後を見据えて大切にしたい取組」の意見のまとめ

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 基本的な生活習慣と身辺自立の確立を推進し、多くの関わりの中で自己選択、自己決定などの機会をもてるようにすること。・ 保護者や地域との連携を深め、障害の理解を推進し、社会参加の基盤を育むこと。・ 「ゆるやかな一貫性」に基づいて、12年間の学習体系を見直し社会参加に向けたより実際的な学習の在り方を探求すること。 |
|--|

そこで、本研究では「ゆるやかな一貫性」という視点から、中学部と高等部で研究を進めることとなった。「ゆるやかな一貫性」を「できるところからつながっていく」、「子どもの活動を中心に据え、つながりのある教育課程を目指していく」と捉え、以下のような授業改善のキーワード（表2）に基づいて研究を推進した。

表2 授業改善のキーワード

- ①児童生徒の「夢・希望」を大切にしたい取組
- ②「自分の存在感」、「自己肯定感」につながる取組
- ③児童生徒の「自分らしい役割の果たし方」につながる取組

具体的な研究の方法としては、中学部の「生活」、高等部の「メンテナンス」の授業を取り上げ、キャリア教育の視点を授業に生かしていく仕組みや卒業後の生活につながる授業の在り方、学部間の連携、現場体験学習や現場実習などの社会体験と授業とのつながりなどについて研究を深めていきたいと考えた。

イ 中学部の取組について

中学部の学級編成は学年学級ではなく、太田ステージ、S-M社会生活能力検査などからA、B、C3つのグループに分けている。グループ分けの目安として、Aグループは太田ステージ「I-1・I-2・I-3」、S-M社会生活能力検査「意志交換・集団参加：1歳半まで」、Bグループは太田ステージ「II・III-1・III-2(-)」、S-M社会生活能力検査「意志交換・集団参加：1歳半～4～5歳」、Cグループは太田ステージ「III-2(+）・IV以上」、S-M社会生活能力検査「意志交換・集団参加：4～5歳以上」で、その他に田中ビネーV知能検査、遠城寺式乳幼児分析的発達検査法、新版K式発達検査2001、行動観察などの視点も参考にしている。今年度は、Aグループ、Bグループの生徒からなる学級を5学級、Bグループ、Cグループの生徒からなる学級を3学級とし、計8学級を基礎学級としている。

「生活」は、個々の障害の程度や実態に応じて、自分を見つめ「ひとりだち」に向けて進路に関わる学習を中心に取り組む授業である。金曜日の5時限（13:05～13:45）に行っており、実態に応じて個々のねらいを達成できるように、「生活」の授業では、基礎学級とは別のAB混合グループ、B1グループ、B2グループ、BC混合グループの4グループ編成で取り組んでいる。

AB混合グループでは、短い見通しをもち、最後まで一人でやりきる力を身に付けるために、年間を通して「積木雑巾」に取り組んでいる（図5）。体をうまく使うことが難しい生徒が、一定時間廊下の拭き掃除に取り組むために、積木に雑巾を取り付け活動しやすく工夫している。

B1グループ、B2グループでは、いつもと違った場所や人の中でマナーやルールを守って活動をできるように、「現場体験学習に向けて」に取り組んでいる。他にも、「自己紹介をしよう」、「遠足の準備をしよう」、「宿泊の準備をしよう」などの取組を通して、仲間意識や自分の役割などを意識できるようにしている。

BC混合グループでは、「職場体験学習『自分さがし・夢さがし』」に取り組んでいる。「職場体験学習」とは、将来、社会人として求められる力を知り、自覚して取り組む力を身に付けるための授業である。この授業が社会の厳しさや社会人としての責任の重さを感じ、社会の仕組みを知るきっかけとなり、日々の生活や自分自身の生き方を見つめ直したり、将



図5 積木雑巾

来の目標とする大人像を抱きそれに向けて努力していこうとする気持ちが育成されることを目指している。具体的には「自分を見つめる」、「身だしなみ・挨拶」などの学習の他に遠足や宿泊の準備を一人でできるように計画段階から取組を行っている。卒業後の生活に視点を当て、自分で考え、解決して、実行する力を付けることを大事にしていきたいと考えている。

このように、「生活」の授業では、障害の程度や実態に応じて、それぞれのグループで「ひとりだち」というキーワードを基に、自らの意思や主体的な行動を大切に取組を進めてきた。特に、BC混合グループでの取組は6年間の実践の積み上げもあり授業内容も充実したものとなってきているという実感があるが、AB混合グループやB1グループ、B2グループの障害の程度が比較的重い生徒にとっても「ひとりだち」に向けた「生活」の授業づくりを進めようと昨年から取り組んでいる。その結果、一定時間落ち着いて作業を続けることができるようになってきたものの、本当に生徒の「やりたい」気持ちを揺さ振る取組なのか、生徒の「やった」、「できた」という実感を伴う活動となり得ているのかという新たな課題が見えてきた。

そこでキャリア教育の視点を通して活動や授業を見直すことで、授業の改善が期待できるのではないかと考えた。

(7) 取組内容

a 「授業における観点位置付け・授業改善シート」の作成

授業改善のツールとして取り入れたのが「授業における観点位置付け・授業改善シート」(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、2008)である。このシートは「①各授業の特徴に即したキャリア教育の具現化、②授業のねらいの明確化及び授業改善、③授業レベルから捉えた教育課程の横断的側面及び縦断的側面の把握を目的」(菊池、2011)としており、「授業改善を図り、指導内容のつながりを確認するもの」(菊池、2011)とされている。作成作業の手順は、「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス(試案)』」(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、2010)の観点から、授業の指導過程に沿って「主たる観点」や「関連する観点」を記入していく。「授業の主なねらいに関連した学習活動がキャリアの観点と一致する場合は『主たる観点』として、授業の主なねらいではないが授業のねらいとして含まれる場合には『関連する観点』としてキャリアの観点を記入する」(菊池、2011)とされている。このような手順で作成作業を進めた。

なお、「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス(試案)』」(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、2010)で、中学部段階において育てたい力として挙げられているのは「自己理解・他者理解」「協力・共同」「意思表示」「場に応じた言動」「情報収集と活用」「社会資源の活用とマナー」「金銭の使い方と管理」「役割の理解と働くことの意義」「習慣形成」「夢や希望」「生きがい・やりがい」「進路計画」「目標設定」「自己選択」「肯定的な自己評価」「自己調整」である。

(a) AB混合グループの「授業における観点位置付け・授業改善シート」

障害の程度が重いAB混合グループでは、年間を通して行っている「積木雑巾」の授業について、指導者が話し合いを行いながら「授業における観点位置付け・授業改善シート」の作成を行った。まず、話し合いでは表3のような具体的な意見が挙げられた。

これまで、活動を一人でやりきることをこの授業の主なねらいとしてきたが、「場に応じた言動」、「協力・共同」、「自己理解・他者理解」などの観点から授業改善のヒントを得

表3 AB混合グループ「積木雑巾」についての意見

- ・活動を一人でやりきることが主なねらいであったが、もっと達成感や自己有用感を味わえるような言葉かけや活動を取り入れていくことが大切である。
- ・雑巾をかけるという作業だけに終わっていたが、雑巾がけを行って廊下がきれいになった、雑巾がどのくらい汚れたかを意識できるように伝えることが必要である。
- ・汚れた雑巾を見て、「これだけ頑張ったんだな」、「きれいになったんだな」と達成感を得られるように工夫する。
- ・周りの人から「きれいになったね」、「ありがとう」などと積極的に声をかけてもらうようにすることで、次の意欲や役割の意識につなげる。
- ・準備から片付けを通して、自分の果たすべき役割の理解につなげる。
- ・積木雑巾の活動から、家庭での手伝いにつなげ、自己有用感を得るようにする。

ることができたと共に、「生きがい・やりがい」や「肯定的な自己評価」をもっと実感できるような仕組みづくりや指導者の意識が大切であることにも気付くことができた。「生きがい・やりがい」を主たる観点の一つとして設定し、目標の見直しにもつながったのである(表4)。

表4 AB混合グループの「授業における観点位置付け・授業改善シート」

キャリア発達段階・内容表(試案)の活用による「授業における観点位置付け・授業改善シート」

学部・学年	AB混合グループ	場所	中1組・小学部前廊下	本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・短い見通しをもって、取り組む。 ・意欲的に取り組み、最後まで一人でやりきる。
教科名	生活	指導者	(中心)辻谷 (サブ)亀西、大堀、 辻之内、小西、江口 西川、山本、鈴木、大西		
題材名	積木雑巾				

学習内容	支援と指導上の留意点	キャリア発達段階・内容表(試案)		気付き		
		主たる観点	関連する観点	次時授業改善点	教育課程への反映	生活全体への反映
1組に集合 1. あいさつ 2. 活動説明 ・コース説明 3. 移動 ・各コースへ移動する。 4. 積木雑巾に取り組む。 ・できるだけ一人でやりきることができるように言葉かけをする。 ・回数の見通しがもてるように洗濯ばさみを服に付けたり、取り組んだ回数分のシールを貼ったりする。 5. 頑張りを発表 ・頑張ったことを発表する。 ・各班で終わりのあいさつをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・積木雑巾を見せ、わかりやすく短い言葉で説明する。 ・場所を覚えているかどうか把握しながら必要に応じてサポートを行う。 	目標設定 <意思>	場に応じた言動 <人間>	<ul style="list-style-type: none"> ・元氣よくあいさつをする。 ・積木雑巾や椅子の準備、片付けに取り組む。 ・作業の前後で汚れ具合を確認。頑張ったことを伝え、達成感を得るようにする。 ・毎回の作業の積み上げが見える形で表示する。 ・ほめ言葉やお礼の言葉かけを多くする。 ・授業担当者以外の先生から「ありがとう」「きれいになったね」などの言葉かけをもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の活動場面においても役に立っている、頑張っていることをしっかりと伝えることが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭でもお手伝いなどを実施し、自分の役割をもちそれを果たすことや家族の役に立っていることを感じることができるようになる。
		自己選択 <意思>	自己理解・他者理解 <人間>			
		生きがい・やりがい <将来>	肯定的な自己評価 <意思>			

(b) B2グループによる「授業における観点位置付け・授業改善シート」

B2グループでは、「現場体験学習に向けて」の授業を取り上げ、「授業における観点位置付け・授業改善シート」の作成を行った。この単元では、働くことに関心をもち仕事に参加できること、作業中の報告や質問の方法について学習することを目的としている。具体的な作業の内容は生徒の実態に合わせて「箸入れ」と「チラシ折り」を準備した。

もう一度、授業を振り返ったとき、表5のような意見と共に、「協力・共同」、「夢や希望」、「生きがい・やりがい」、「肯定的な自己評価」などの視点を今後の授業の中に取り入れていくことが必要であると確認できた(表6)。

表5 B2グループ「現場体験学習に向けて」についての意見

<ul style="list-style-type: none"> ・授業の中で大切にしている作業中の態度、報告、依頼がほぼできるようになってきていた。他の授業でも大切にしていきたい視点である。次へのステップアップをどのようなものにするか考えなければならない。 ・作業を通して、達成感は得られているように思うが、もっと生徒が主体的に意欲的に取り組んでみたいと思える学習内容を考えなければならない。 ・授業担当者以外の教職員から依頼を受け、評価してもらえそうな活動にする。そうすることでいい緊張感の中で活動ができ、最後には生徒の達成感が自信にもつながる。
--

表6 B2グループの「授業における観点位置付け・授業改善シート」

キャリア発達段階・内容表(試案)の活用による「授業における観点位置付け・授業改善シート」

学部・学年	B2グループ	場所	中5組教室	本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・働くことに関心もち、仕事に参加する。 ・困ったときや分からないときには、人に尋ねたり教えてもらったりして目的を果たす。(仕事分からないときには質問や依頼を行う。できたときには報告を行う。)
教科名	生活	指導者	(中心)菊川 (サブ)稲田、高原、古川		
題材名	現場体験学習にむけて				

学習内容	支援と指導上の留意点	キャリア発達段階・内容表(試案)		気付き					
		主たる観点	関連する観点	次時授業改善点	教育課程への反映	生活全体への反映			
教室に集合・座席確認 1. あいさつ 2. 7月に現場体験学習に行くことを知る。 3. 作業に当たって注意することを知る。 ・丁寧に作業する。 ・静かに取り組む。 ・座って取り組む。 ・困ったときには尋ねる。 4. 先生の見本を見る。 5. どんなことに頑張るか「頑張リシート」に記入する。 ・項目の中から選んで○をつける。 6. 作業に取り組む。 ・困ったときには高原先生に声をかけるようにする。 ・できあがったら菊川まで持ってくる。 7. 振り返りを行う。 ・できた項目に○をつけ、自分で評価する。 ・先生からの評価を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレットを準備しどこに行くのかイメージをもてるようにする。 ・生徒からの意見を聞きながら、大切なポイントの4点を確認する。 ・シートに書いて分かりやすく示す。 ・困っている時は、生徒の様子を見ながら、言葉をかける。できるだけ生徒自身の気付きを大切にする。 ・「頑張リシート」で各自評価する。 ・迷っている場合は、担当の先生と相談する時間を設ける。 ・それぞれの生徒の良かった点について褒め、自信へとつなげる。 	場に応じた言動 <人間>	役割の理解と働くことの意義 <情報>	協力・共同 <人間>	夢や希望 <将来>	生きがい・やりがい <将来>	肯定的な自己評価 <意思>	<ul style="list-style-type: none"> ・依頼や報告のスキルについては「朝の活動」「国語・数学」「グループ学習」などにおいても意識して取り組むようにする。 ・高等部の授業とのつながりを考えていく。 ・身近な先生以外から仕事の依頼を受ける形で設定を行い、自分たちの役割を意識する。 ・自分からもっとやってみたいと思えるような活動や働くことに期待をもてるような取組を取り入れる。 ・みんなに喜んでもらえるような活動や役に立っていると感じられるような活動を取り入れる。 ・身近な先生以外から評価をもらえるような設定をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・好きな活動だけでなく、お願いされたことにも取り組めるようになることも必要。将来の仕事にもつながっていく。 ・家庭でのお手伝い <保護者との連携> ・学校でのお手伝い <先生との連携>

新たに気付いた授業改善点

これまでも、授業において、例えば、「〇〇が～回できる」、「〇〇が～分間できる」といったスキル面や量的なねらいは明確にさせてきた。しかし、それらのねらいが本当に卒業後の生活につながるようになるのだろうか、また、「なんのために」その作業をさせるのか、といった視点をもつことが、障害の程度が重い生徒にとっても大切にしなければならないことを感じた。このように、「授業における観点位置付け・授業改善シート」を活用しつつ、話し合いを進める中で、「生活」の授業において、生徒のやりたいという「意欲」や自分からという「主体性」を大切にするとする視点、人の役に立っているという「役割」の意識、頑張った自分を感じる「自己肯定感」などを大切に育てていくという視点を授業の中に意識的に組み込む必要があることを改めて確認でき、指導者間で共有できたことは重要であった。

b 「生活」B2グループの授業づくり

1学期の授業である「現場体験学習に向けて」について「授業における観点位置付け・授業改善シート」を作成したことで、上述のように、2学期の授業に生かせる具体的な意見が出された。これらの意見を実現するにはどのような学習内容がよいか、さらに、「ゆるやかな一貫性」の視点から、高等部との連携を視野に入れた授業を行うことはできないかと検討を重ねた結果、高等部の作業学習の一つである「メンテナンス」の授業が話題に挙がった。「メンテナンス」は学校内の教職員から依頼、発注を受け、様々な作業を精度の高い技術力で実践しているため、高等部の生徒から作業を実際に教わることはできないか、出前で授業に来てもらうことはできないかと考えたのである。しかし、高等部の「メ

表7 「ペンキ塗りを体験しよう」指導内容

単元名 『ペンキ塗りを体験しよう』（計6時間）	
単元目標 高等部の先輩の活動を通して、憧れや働くことへの関心を持ち、自分から取り組もうとする力を付ける。	
内 容	
「先輩から教えてもらう前に」 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部の先輩から教えてもらうために気を付けることを考える。(話を聞く姿勢・言葉遣いなど)
「先輩から教えてもらおう」 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩からペンキの塗り方、注意事項を教えてもらう。 ・ペンキ塗りの見本を見て、興味をもった場面やかっこいいと思った姿をカメラで撮る。 ・ペンキ塗りを体験する。 ・先輩から頑張っていたことなどの評価を聞く。
「目標を考えよう」 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の授業（ペンキ塗り）を思い出す。 ・自分が撮った写真から2枚を選び「目標シート」に貼る。 ・ペンキ塗りの目標を立てる。 ・目標をみんなの前で発表する。
「ペンキ塗りをしよう」 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩から教えてもらったことと自分の目標を確認する。 ・ペンキ塗りの作業に取り組む。 ・サブの教職員から頑張っていたことや注意することを聞く。
「報告をしよう」 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・報告書に頑張ったことやペンキ塗りの感想などを書く。 ・班に分かれて、校長先生、事務長、高等部主事に報告に行き、コメントを書いてもらう。

メンテナンス」は木曜日、中学部の「生活」は金曜日で時間設定が異なり、高等部の生徒は本来の時間割通りの授業へ出席をしなければならない。また、3つの学部で運営される特別支援学校においては時間割変更も容易ではない。さらに、体験学習以外では中学部と高等部のコラボレーションの授業はこれまで行われたことがなかった。大きな課題はあったが、高等部生徒の姿から、夢や希望を学んで欲しい、自分にもできるという自信ややりがいをもって欲しいという願いから高等部への依頼を始めた。協議の結果、中学部「生活」B2グループからの依頼を受けるとい形で、高等部「メンテナンス」の生徒（以下「先輩」という。）による出前授業が実現することとなった。出前授業を含めた単元「ペンキ塗りを体験しよう」の指導内容は表7である。

(a) 高等部の先輩から学ぶ「先輩かっこいいな！」

当日は、先輩がローラーを準備、ペンキをトレイに入れるなど、精力的に動いている所に生徒が次々と来て椅子に座っていく。先輩の姿を見ながら自然と静かになる。生徒は明らかにいつもとは違う緊張感を覚えている様子だった。前日に学習したことを覚えていて、「〇〇ちゃん」という呼び名は一切聞かれず「〇〇先輩」という言葉とともに真剣な眼差しで先輩が準備している様子を見ていた。

始めに先輩からペンキの塗り方や注意事項の説明があった（図6）。本物の作業着を身に付けているその姿から目を離すことなく、静かに集中して聞き入っていた。いつもとは少し違う先輩の何かを感じているようであった。

次に先輩の行う見本をデジタルカメラで撮ることにした（図7）。言葉での表現が難しいため、表現方法の一つとして取り入れたものである。「かっこいい姿を写真に撮る」という活動

は、先輩への憧れやこんなふう塗りたいという思いが強まっていった。ペンキがかかるのではないかと心配になるくらい体を乗り出して、何枚も撮る生徒もいた。写真を撮る活動は、これまで、授業でも取り組んだことがなく、どれくらい撮れるのか心配であったが、全員が上手にカメラで先輩の姿を捉えることができていた（図8）。

そして、いよいよペンキ塗り

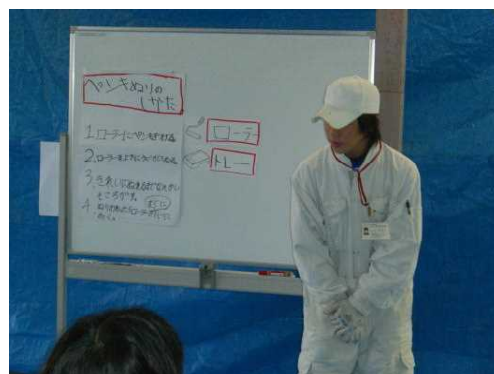


図6 ペンキ塗りの説明



図7 先輩の見本をカメラで撮る



図8 生徒が実際に撮った写真

体験である。すでにやりたい気持ちが高まっている様子で、「やりたい人？」の言葉かけに全員が一斉に手を挙げた。1組目の3人の体験が終わった後、再度「やりたい人？」の声かけをした。普段の活動では、一度行った後「やりたい」と何度も手を挙げる場面が多くあるのに対し、重複して手を挙げる生徒は一人もいなかったのである。浮ついた



図9 ペンキ塗り体験

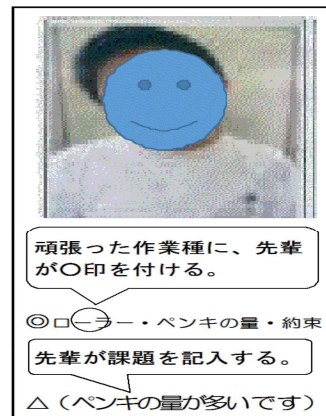


図10 チェックシート

雰囲気はなく体験を通して達成感を強くもてたのではないだろうか。「ペンキの薄い所があります。」「約束が守れてよかったです。」「きっと上手になると思います。」など先輩からの言葉に集中し、一人一人しっかりと受け止めることができていた(図9)。

また、先輩が中学部生徒のペンキ塗り体験の様子をチェックシート(図10)に記入し、中学部生徒の作業の様子について発表した。上手に塗れた生徒として名前を挙げてもらった生徒はこれまでにない笑顔を見せ、自分から拍手する、友達とハイタッチするなど教職員から言われるのと明らかに違う姿を見せていた。「やった」、「できた」という思いを全身で表現していた。最後に校長先生からペンキ塗りの依頼書をもって、次回からは中学部の生徒がこの柱のペンキ塗りを任せられることになった。

(b) 自分で作業「できた」、「もっと上手に塗るぞ」

3時間目は、自分でペンキ塗りの目標を考えた。始めに、前日に撮った写真のスライドショーを見て活動の振り返りを行った。そして「目標シート」(図11)に、カッコいい先輩が写った写真を貼り、次回からの自分の目標を考え、みんなの前で発表した。

4、5時間目は、校長先生から依頼を受けたペンキ塗りに取り組んだ。最初に先輩から教えてもらった塗り方、注意事項を再度確認し、自分の目標も改めて確認した。多くの生徒が、体験より2回目の方が上手に塗れた。「ペンキをたくさん付けすぎない」、「低い所は、腰をかかめるのではなく座って塗る」など1回目の課題を克服する様子が見られた(図12)。

場所が体育館への通路ということもあって、人が通ったり、体育館から音楽が流れたりしていたが、周りに惑わされる生徒は少なく、最後までよく集中していた。

ペンキの量を調整しながら柱の角を自分で納得するまで塗っていた生徒は、授業終了後、自分の出来栄を



図11 目標シート



図12 ペンキ塗りの様子

を再度確認して「上手に塗れているぞ。」といった表情を見せ、満足げに教室に戻っていた。また、別の生徒は、クラス担任に塗った柱を指さして「ここぼく塗ってん。」と自信たっぷりに伝えている様子が見られた。完成まで取り組めたことで生徒一人一人の自信につながり、「できた」という達成感を十分に味わうことができた取組になった。

(c) 完成の報告「ペンキ塗りできました」

6時間目は、作業完成の報告を行った。「誰に報告をしなければならないのか。」という質問に、2時間目に依頼を受けたことを覚えている生徒もいて「校長先生」と答える生徒もいた。校長先生の外に、高等部の先輩に教えてもらったことで高等部主事に、ペンキやローラーなどを準備してくれた事務長にも合わせて報告に行くことにした。

報告書(図13)には、班に分かれてペンキ塗りで頑張ったことや感想などを書いた。校長先生に報告に行った生徒は、校長室に入り「ペンキ塗りできました」と元気な声で報告できた(図14)。高等部の主事に報告に行った生徒は、コメントを書いている間、よそ見をしたり他の場所に行ったりすることなく、少し緊張した表情で立ったまま姿勢を崩さず待つことができた。事務長に報告に行った生徒も「できました」と報告ができ、事務長に書いてもらったコメントを読むと、ガッツポーズをして「やったー」と言って喜ぶ場面が見られた(図15)。



図13 報告書



図14 「ペンキ塗りできました」



図15 「やったー」

それぞれの生徒の「できました」という言葉には、最後までやりきった達成感がつまっていた。普段接することの少ない教職員に肯定的な評価をもらったことで、いつもと違った姿で喜びを見せていた。

この単元が終わった後、「先生、今度ペンキ塗りいつするの。」と聞いてくる生徒、「生活」の授業の話をする時、ローラーを上下に動かすジェスチャーをしながら、またやりたいことを伝えてくれる生徒の姿もあった。

(イ) 成果

a 「授業における観点位置付けシート・授業改善シート」作成から

AB混合グループ、B1グループ、B2グループ、BC混合グループ全ての「生活」の

授業について「授業における観点位置付けシート・授業改善シート」を作成した。特に、障害の程度が比較的重い生徒からなる、AB混合グループ、B1グループ、B2グループでは、生徒のやりたいという「意欲」や自分からという「主体性」を大切にする視点、人の役に立っているという「役割」の意識、頑張った自分を感じる「自己肯定感」を大切に育てる視点を意識して組み入れることが必要であることに気付くことができた。これらの力はまさに、将来の生活につながる付けたい力である。また、そのために必要な取組そのものの改善点や仕組みづくりや教職員の具体的支援が明らかになり、授業改善のヒントになったと感じる。

b 「ペンキ塗りを体験しよう」の授業づくりから

今回の「ペンキ塗りを体験しよう」の取組は、「授業における観点位置付けシート・授業改善シート」の作成から得られた視点を踏まえると共に、高等部との連携を視野に入れた授業づくりであった。生徒は教える先輩の姿に触れ、憧れの気持ちを強くしたに違いない。また、校長先生から依頼を受けることも、接点のない教職員へ報告をすることも全て初めての体験であり、心地よい緊張感とともに大きな達成感を得た取組となったのではないだろうか。まさに生徒の「やりたい」気持ちを揺さ振る取組、そして生徒の「やった」、「できた」という実感を伴う活動となり得たのではないだろうか。

c アンケート調査から

6月に中学部教職員にアンケート調査を行った。「キャリア教育の視点を取り入れることで授業改善が進むと思いますか？」という質問に対して「進む」が39%、「どちらかと言えば進む」が39%、「どちらかと言えば進まない」が5%、「分からない」が17%であった。今回、研究の対象とした「生活」という授業について12月にアンケート調査を行った。「キャリア教育の視点を取り入れることで具体的な授業改善のヒントにつながったか？」という質問に対しては「つながった」が78%、「どちらかと言えばつながった」が22%という回答を得ることができた(図16)。「授業における観点位置付けシート・授業改善シート」の作成という具体的な作業を通したことが意識の改善につながったのではないだろうか。

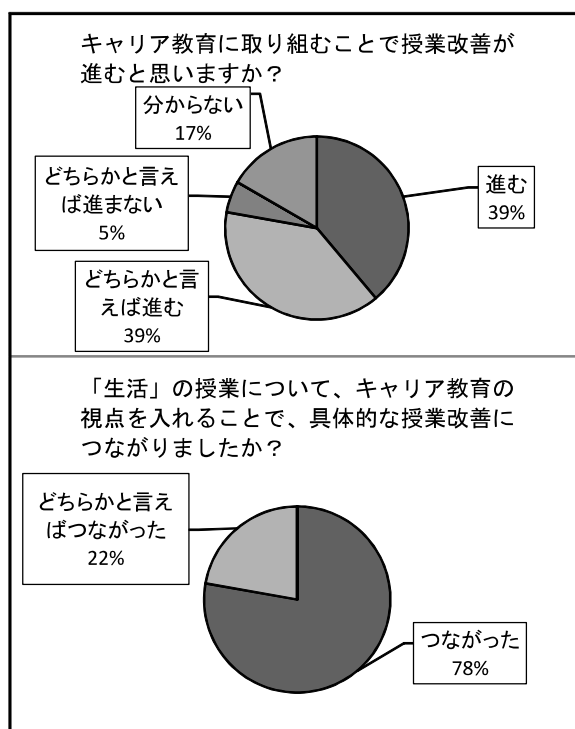


図16 キャリア教育の視点での授業改善についてのアンケート結果

また、「ペンキ塗りを体験しよう」の授業は、学部間の連携が進むきっかけになったと思うか」の質問に対しては「思う」が56%、「どちらかと言えば思う」が44%であった。そして、高等部と具体的にどのような連携が考えられるかを聞いたところ表8のような意見が出された。

このように、今後どのように高等部と連携していくかについてや教育課程の見直しにも

つながる意見など、様々なアイデアを得ることができた。中学部の取組を高等部につなげる、そして卒業後につなげるという意識を常にもちつつ、これらのアイデアを実現させていく努力をしていきたいと考えている。

表 8 高等部との連携についての意見

<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学部の現場体験学習や職場体験学習と高等部の実習はいろいろな連携の仕方があるように思う。進路指導部とも連携しながら行っていく必要がある。 ・ 高等部の作業学習と中学部のジョブタイムは木曜日の午後という同じ時間設定である。仕事の勉強ということで高等部の作業学習を見学してはどうか。 ・ 高等部で行っている本格的な取組と一緒にすることがとてもよいことだと感じた。高等部の生徒にとっても学びがあり、実りのあるものにしていく必要がある。ただ時間割との兼合いが難しい。 ・ 高等部の作業学習に関わることを、中学部に依頼してもらってはどうか。例えば、ペンキ塗りに向けて、マスクングを中学部がする。中学部から高等部へ「できました」の報告をする。目上の人に対する言葉遣いを学ぶ機会にもなる。 ・ 例えば、高等部に自分で願書をもらいに行く機会などを設定してはどうか。 ・ 高等部への憧れがもてるようなつながりが作れば良い。頑張っていることを評価してもらえたら、励みになると思う。 ・ 現場体験学習の前に高等部の手作業などに入れてもらって、いつもと違う雰囲気の中で作業する経験を設けるのはいいと思う。 ・ Aグループの生徒にとって、高等部の先輩とどう関わるか、誰とどのように連携をとっていけばよいか分かりにくい。高等部の教室が隣で、高等部の先輩や教職員が中学部の生徒を気にかけてくれている。そこから連携が始まっていくのではないかと。 ・ 高等部の集団は魅力的である。高い力をもつ生徒が集団を作ってくれて、集団が流れていく。重度の生徒も入りやすい。中学部の生徒もそんな流れの中に入って活動できるのもいいのではないかと。
--

(ウ) 課題

卒業後の生活を見据え、キャリア教育の視点を大切にしていかなければならないのは、今回の研究の対象であった「生活」の授業だけではなく、国語や数学、体育などの教科学習においても同様であることは言うまでもない。

しかし、中学部において、「役割を果たす」、「働くことに興味をもつ」、「達成感を覚える」などをねらいとする「グループ学習（職業・家庭）」や「ジョブタイム」では、キャリア教育の視点を取り入れたとき、どのようなねらいが見えてくるのか、どのような改善点が見えてくるのか、高等部につながる、卒業後につながる取組になっているのかを、より一層検証していく必要がある。

学部間の連携、12年間の一貫性はこれまでも大きな課題として挙がっている。今回の取組では、他学部の生徒と一緒に活動をしようというだけでなく、「教える」「教わる」という役割の中で活動に向かう体験を通して、これまでになかった意欲や主体性が見られた。中学部として、生徒にどのような力を付けたいか、それをどの場面で取り組んでいくのか、キャリア教育の視点をもちながら今後も引き続き検討していかなければならない。そして、高等部、さらには卒業後の社会参加につなげるための「ゆるやかな一貫性」を具体化させるために、必要な取組を中学部から積極的に発信し、実現できるよう、学部間で連携しながら教育課程の見直しを図ることが必要となる。

ウ 高等部における取組

高等部では作業を主とした選択授業が10種類ある。1年ごとに、取り組みたい、あるいは、取り組ませたい学習内容やねらいに合わせ、生徒、担任、保護者が相談して履修する授業を

決めていくことになる。これらの授業担当者の中では、前年度から「授業で育てたい力」について具体的な話合いがもたれており、それぞれの授業の特徴を生かし、ねらいや学習内容の明確化を進めている。「メンテナンス」はその中の一つであり、木曜日の午前と午後を通して4時間の設定で時間割に位置付けられている。本年度は12名の生徒に対して4名の教職員という体制で実施している。この授業の目標は「工具や用具などを活用して作業に取り組むことを通して、基礎的な知識や技能を身に付けるとともに、他者と関わりながら主体的に仕事（作業）に向き合う態度を養う」であり、主に校内の整備や清掃を題材として取り組んでいる。しかし、実際の作業が指示的であったり、個別の課題や本人の願いなどとの関連が希薄であったりするなど、卒業後の生活につながる主体的な活動になっているとは言えず、具体的な授業改善の必要があった。

そこで、キャリア教育の視点を取り入れた授業改善に取り組むことを通して、卒業後の生活につながる授業の在り方の研究を進めることにした。この研究では、生徒が意欲をもって様々な活動に取り組むことで自らの認識や視野を広げ、主体的に自分の将来に関わっていく姿勢や態度を育てる授業改善とし、同時に学部や学校全体に対して、授業におけるキャリア教育の視点の有用性を発信し、その広がりにもつなげていきたいと考えている。なお、授業と現場実習との関連については、「授業づくり」と「現場実習の事後学習の充実」の両方からアプローチが必要であると考え、特に、後者については高等部の研究部、教務部、進路指導部と連携しながら進めることにした。

(7) 取組の内容

a 意欲につながる学習活動を目指して

(a) 役に立つことを実感するための仕組み

生徒が指導者の説明や指示を理解し、その作業に取り組むだけでなく、作業学習の中に「依頼を受ける」→「作業」→「納品」というプロセスを作ることによって、生徒自身が、「なんのために作業しているのか、どのように役に立つのか」を直接感じ取ったり、役に立っている自分を確認したりすることができるのではないかと考えた。依頼者から届いた依頼票は「メンテナンス掲示板」に順次掲示した（図17）。これには依頼者の名前以外の、作業内容や希望の納期などが書かれており、生徒がそれらの情報を見て、作業への関心を高めたり、見通しにつなげたりするねらいがあった。それまでは「次のメンテナンス何するんですか。」と生徒に尋ねられることが多かったが、掲示板を設置してからは授業前に教室に来て掲示された依頼票を見る生徒が出てきた。



図17 メンテナンス掲示板

(b) 選択と意思表示をする場面

作業内容の選択と班の編成は、生徒自身の希望に基づいて決定するようにした（図18）。これは、常に変化する環境の中で、自分の役割や分担を主体的に決めることをねらいとしている。作業内容の予告はあえて行わない。授業の冒頭で提示された作業の中から一つの作業を選択するには、指導者の説明に注目し、さらに、理解しようとする姿勢が必要になってくる。また、様々な情報を短時間に判断して自身の意思表示をする必要がある。初め

はうまく意思表示ができない生徒もいたが、経験を積むにつれ全員がしっかりと手を挙げられるようになった。中には自分の希望だけでなく、男女のバランスや人数配分など、集団全体のことを考慮して意思表示する生徒、「メンテナンス掲示板」を見て次に提示される作業内容を予測する生徒、自身で校内の修理箇所を見つけて自らの授業に依頼票を提出する生徒も現れたりした。回を重ねるにつれ、それぞれの生徒が作業経験の中で身に付けた知識や技能を生かして活動する場面が増えてきた。また、自分で選択した作業の経験を積み重ねることで、個々の生徒の作業技能がより高まっていった。



図18 作業を選んで意思表示する場面

(c) 未経験のことに会うワクワクドキドキ

まず、作業中、身に付ける安全のための装備や写真付きの名札は生徒と共に準備した。また、作業で用いる用具や工具はできる限り本格的なものを用意し、電動工具なども積極的に取り入れた(表9)。これらは、未経験なことに前向きにチャレンジするための興味

表9 取り組んだ作業と使用した工具など

主な作業内容		主な工具・用具・装備等	
中学部教室の床のクリーニング	公用車の洗車と車内清掃	電動インパドドライバー	カッターナイフ
高等部教室の床のクリーニング	教室の照明器具の角度修正(全学部)	振動ドリル	ドライバー
高等部廊下の床のクリーニング	サイクルロード周辺の整備	レーザー水準器	ラチェットレンチ
メンテナンスのメンバーの名札づくり	保健室の壁の補修と塗装	エンジン式高圧洗浄機	網戸用ローラー
高等部廊下の壁の塗装	バス職員控え室の障子の張り替え	電動高圧洗浄機	ワイヤーブラシ
エアコンのフィルターの清掃	保健室の棚の製作と設置	電気バリカン	デッキブラシ
自転車のタイヤ空気圧点検	網戸の張り替え(3カ所)	電気丸鋸	手押し車(一輪車)
プレイルームのスピーカーの配線と設置	中学部授業でのペンキ塗り指導(コラボ授業)	卓上ボール盤	脚立・洗車台
プレイルームの掲示板の取り外し	教室の空調フィルターの清掃(高等部全クラス)	電動ポリッシャー	金槌 木槌
プレイルームのホワイトボードの設置	ガスボンベ倉庫の扉のサビ落としと塗装	大型扇風機	バール
廊下のパネルかけの塗装	保健室の床のクリーニング	エアコンプレッサー	空気入れ
木製ベンチの塗装(16台)と解体	保健室のソファの修繕	エアータッカー	シャベル
プールサイドの清掃	体育館セラピーマットのクリーニング(32枚)	スクレーパー(金属のヘラ)	自作の角度ゲージ
プール横トイレの清掃	楽器(ボンゴ)の修理(3台)	オートボンチ	ゴーグル
ショップ用のスチールコンテナの塗装(校外)	図書室のホワイトボードの固定	塗装用刷毛・ローラー・トレー	ヘルメット
朝礼台の塗装	高等部職員室のコピー用紙の棚づくり	ナイロンたわし 金属たわし	防護面

関心を引き出すツールとしてのねらいがあった。工具は従来であれば非常に手間のかかる作業をいとも簡単にこなしてくれ、作業自体を楽しくしてくれる要素をもっている。特に、電動工具は安全に対する注意や緊張感が必要ではあるが、生徒の五感を刺激し、ワクワクドキドキにつながると考えた。さらに、高い知識や技能及び安全に対する注意が必要である工具を使う姿を他人に見てもらうことで、自尊感情を高めるというねらいがあった。その結果、多くの生徒は興味関心をもって、未経験の作業にも取り組むことができ、依頼者からも高い評価を得ることにつながった(図19・図20)。それでも不安や恐怖を感



図19 電気バリカンで生け垣の手入れをする男子生徒

じている生徒には、指導者が一緒に手を添えたり、他の生徒が使うのをしばらく観察したりしてから使うことで、新しいことにチャレンジする不安を少なくし経験を積ませるなど、技能の高い低いに限らず、達成感と自信につなげる配慮は必要であった。



図20 振動ドリルで教室の壁に下穴をあける女子生徒

ある日の授業で、作業服にヘルメットと名札を身に付けた男子生徒が、脚立と電動ドリルを持って廊下を歩いていると、通りがかった教職員から工事業者と間違えられ、「ご苦労様です。」と声をかけられた。「あまりにも堂々としていたので全く気付きませんでした。」というその教職員の言葉に対して、生徒は照れくさそうな顔で会釈して応えた。後でやや自慢げにその出来事を友達に話している姿があった。もう一つ納品作業でタブレットパソコンも使用することにした。納品の場面で依頼者に画面の写真を見せながら話すことで、説明が分かりやすくなるだけでなく、説明が苦手な生徒を支援するねらいがあった。タブレットを操作しながら写真を順に見せることで、順序立てて作業内容を説明できた場面もあった。



図21 記録用紙の記入と指導

(d) 作業の振り返りと自己評価・他者評価

生徒の気付きや自分の気持ちの変化を文字や文にする経験を積むことで、作業への向き合い方の自覚につなげたいと考えた。そこで記録用紙を用いて生徒自身の作業の振り返りを大切にしたい。記入の内容がより具体的になるよう一つ一つの場面を思い出して言葉にする支援を行い、毎時間、記入できた内容を継続的に評価していった(図21)。さらに、生徒が「高めた技能をもっと使いたい」という思いを発信できる場面として「次やりたいこと」の欄を設けることにした。知識や技能を発揮したいという作業の意思表示だけでなく、仲間とのつながりや働いた後の充実感の共有なども自由に書ける欄を設けることで、作業経験から得られる「もっと」という気持ちを引き出し

授業「メンテナンス」記録用紙	
【作業の記録】()年()月()日()	生徒氏名 ()
作業年月日	平成25年10月2日(木) 午前・午後
作業内容	保健室の壁の補修(金具) ◎納品作業(あり・なし)
装備(○印)	ヘルメット、ゴーグル、マスク、グローブ、手袋、その他()
使用した用具	ペンキ、電動ドリル、ネジ、ビス、ローラー
メンバー	生徒氏名
【作業の振り返り】	
できた	A B C D できなかった
難しかった	A B C D 簡単だった
しんどかった	A B C D 楽だった
またやりたい	A B C D もうやりたくない
【わかったこと・気づいたこと】	
- 補修のやり方、 壁の補修のやり方。	
【感想】補修の壁の補修や塗装の作業は、毎日、同じ作業をして、せしめて、 作業のやり方を知ることができた。また、壁に目印を付けて、作業のやり方を 確認することができた。また、壁の補修のやり方を知ることができた。また、 壁の補修のやり方を知ることができた。また、壁の補修のやり方を知ることができた。	
【次の目標(次やりたいこと)】	
- 塗装のやり方。	
先生チェック	作業の内容 () 4 3 2 1 作業の姿勢 () 4 3 2 1

図22 記録用紙

たいと考えた。中には何を書いたらよいのか分からない生徒もおり、「やりたいこと」について指導者と会話をするきっかけとなっている(図22)。初めは「やりたいことはありません。」と発言していた男子生徒が、授業が始まって3か月目のある日、指導者とのやりとりの中で「次もやりたいです。」と言った。「どうしてやりたいと思ったの。」と指導者との会話が続いた後、記録用紙の「次やりたいこと」の欄に初めて記入することができた。記入した内容はその日に黙々と取り組んだ塗装の下地づくり(鉄の扉を紙やすりで磨く)の作業だった。それ以降、この男子生徒の記録用紙にはいろいろなやりたいことが記入されていった。このような場面は、生徒の「なぜやりたいのか」や「どこに魅力を感じるのか」を指導者がキャッチし受け止める機会になっていった。

(e) 「納品」における人や社会との関わり

これらの形式で学習活動を行うには依頼者の理解と協力が必要であった。教職員全体へ趣旨をアピールすることで、校内から多くの作業依頼をいただくことができた。授業の題材として用いるには内容の吟味が必要となってくるが、各学部の教職員以外にも、保健室、給食室、事務室、バスの職員など多くの大人と関わる



図23 直売ショップの塗装

ることができる機会となった。また、校外の事業所からも作業依頼をいただいた。用具一式と希望する生徒を車に乗せて出張作業に出かけた(図23)。納品作業で用いる納品書(図24)には、作業報告の外に「依頼主満足度アンケート」を設け、「作業の仕上がり」、「納品時の生徒の態度」、「説明の分かりやすさ」も5段階評価されるとともに、依頼者の感想・アドバイスの欄に具体的に記入してもらうことができた。生徒は、約束の日時にアンケートを自ら回収に行き、授業の担当教職員へ届ける。生徒は、その内容の一つ一つに教職員と一緒に目を通しながら自分の評価を振り返ることで、自身の課題に気付くとともに、指導者が生徒の気付きに気付くことができ、次の目標を確かめ

作業報告書(納品書)	
平成 25 年 10 月 31 日	
奈良県立大淀看護学校 保健室 様	
担当者 チーフ 	高等部 選択授業 メンテナンス 〒638-0821 奈良県吉野郡大淀町下淵 414-1 大淀看護学校 高等部 産業科(作業選択A) TEL 0747-52-7655(代) FAX 0747-52-8620
作業完了月日	平成 25 年 10 月 31 日(木)
作業場所(品)	保健室の棚の設作
作業前の状況	保健室のかげに棚がなかった。 保健室の右あぐりの物おきに
作業内容	棚をとりにつける
作業担当者	記入者 生徒氏名
<p>☆【依頼主満足度調査】(アンケートにご協力下さい。あてはまるところに○印をつけて下さい。)</p> <p>1. 作業内容(仕上がり)について</p> <p>とても満足 () 満足 () 普通 () 不満 () とても不満 ()</p> <p>2. 担当者の説明時の「態度」について</p> <p>とても良い () 良い () 普通 () 良くない () とても悪い ()</p> <p>3. 担当者の説明の「わかりやすさ」について</p> <p>よくわかる () わかる () 普通 () わからない () まったくわからない ()</p> <p>4. ご意見・ご感想・ご要望・アドバイスなど</p> <p>ずっと長年の棚がなかった。こんなにきれいなお棚がつけるとは思っていなかった。とてもうれしかったです。ありがとうございます。また、細かい作業、思いにしました。棚地君のおかげで、最終日は残念でしたが、貴社にも感謝です。 また、納品時社員の説明は少し残念でした。よく知っている人、仲の良い人ほど、けいめいした説明は聞かなくていい。仕事を仕事だと思えば、(納品説明) 従事者の説明、言われた態度は◎です。また作業依頼した時にはよくね。(千田元王、森安元吉)</p>	

図24 納品書

る貴重な機会になると考える。次の授業では一人の気づきを生徒全員に紹介することで、作業への自信や次の意欲へとつなげていきたいと考えた。作業技能が非常に高いある男子生徒は、仕上がりに自信をもって納品したが、アンケートでは説明時の声の大きさや態度を指摘され、その後の自覚につながっていった(図25)。



図25 事務室への納品作業

(f) 集団を意識した作業への意識

3学期の作業は個人の希望を基に、3つの班(壁などの塗装班・空調フィルターの清掃班・床のクリーニング班)を編成し、メンバーを固定する予定である。これまでに、授業を通して習得した知識と技能を生かしながら、チームのメンバーと共により大きな仕事を成し遂げることを目的とし、一つの作業技能に特化したプロジェクトチームを編成し、目標と計画を立てて修正を加えながら作業を進めることになっている。チームの中で自分の分担と相互の協力、コミュニケーションなどを意識して作業に取り組むことで、リーダーとしての責任や自分らしい役割の果たし方を感じる取組にしたいと考えている。

b 現場実習とつながる学習活動を目指して

(a) 「現場実習 ふり返しシート」の作成

「現場実習」と「今の学習活動」をつなげるために、事後学習における生徒自身の振り返りを充実させる取組を始めた。生徒自身が将来に向けての視野を広げながら、今の課題に取り組むための理由や意識を明確にしていく活動と、教職員がそれを支援していく時間の位置付けが必要だと思ったからである。そのためのツールとして「現場実習ふり返しシート」(以下「ふり返しシート」という。)を作成した(図26)。学級担任との面談を通して、自分の気づきや他者からの評価をしっかりと振り返り、将来の希望や自分の課題、目標などを確かめられるものにしたいというねらいが

現場実習 ふり返しシート	
2 年 3 組 氏名 (生徒氏名)	
実習先	実1部
仕事内容	接客実習 ショッピングカート(計量)完成
【実習の自覚】	相手の顔を見て接客。10分休みは実習に来た。
気づいたこと	緊張もある。笑顔が作りにくかった。
他の人から(担任・実習先)	今年11月頃に新しいものに開けた事を知ってもらいました。
その他のふり返しメモ	
↓	
私の将来の希望	
卒業したら、実1部に来たいです。	
実習から分かった今の課題	
(本人)	(担任: 中)
接客ももっと上手になりたいです。	接客の仕事になったために、なじみのない人や知らない人と接客することにチャレンジしてほしいです。
☆<	先生) >の授業でがんばりたいこと
商品の作業に緊張して、知らない人と話せるようにする。	

図26 ふり返しシート

あった。これを使って学級での事後学習を行いながら、有効的な使い方や紙面の修正を進めることができた。さらに、個人面談の位置付けや進め方などについても討議を重ねながら、振り返りの充実に対する理解を深める機会となっていた。

授業では、現場実習とのつながりを作る場面として「実習おかえりコーナー」を設けた。実習を終えた生徒が授業の冒頭に実習の報告をする。実習内容の報告だけでなく、ふり返りシートの内容を基に、将来の希望や課題、そのために今頑張りたいことなどを自分発信のプランとして発表することにした。これらを学習場面と関連付けることで、少しでも「今頑張っていることが将来に役立つ」という意識の確立につなげたいという意図があった。また、他の生徒の報告を聞くことによって、今後の自分の実習に向けた認識の広がりにもつなげさせたいと考えた。

(b) 生徒の発信を継続して支える視点

ある生徒は、接客を必要とする実習において人と話すときにいつも下を向いてしまうことが課題となっていた。実習の事後学習では、学級担任と一緒にふり返りシートの記入を進める中で、自分の課題を明らかにし、「メンテナンスの授業で納品のときに相手の顔を見て話せるようになる」という目標を立てることができた。

その後、何度かの経験を重ね、ついに笑顔で相手（他学部の教職員）の顔をしっかりと見て納品することができた。その後の授業では自分の課題を意識し、納品作業に対して正面から向き合おうとする姿が見られた（図27）。彼女の心の中に「前の実習ではできなかったが、頑張ればいつか（次は）自分にもできる」という意識が芽生えたように思う。指導者として同じ視点をもって今後の学習に取り組んでいきたいと考えている。



図27 実習の課題を意識して取り組む納品作業

(c) 共通理解のためのツールづくり

生徒の具体的な発信を受け止めながら学習の支援や指導を行い、複数の教職員が生徒の姿勢や意識の変化を見ていくことが大切だと感じた。そのための情報共有ツールとして「実習のふり返り一覧表」と「変化のきざしシート」（表10）を作成した。これによって、生徒の発信する内容を把握するとともに、通常の教科会議では交流しきれなかった生徒の変化を共通理解することができた。些細な変化でも記録することで、指導者が継続的に生徒の姿勢や態度に意識を向け、学習時の支援や指導に生かし、

表10 変化のきざしシート

「メンテナンス」変化のきざしシート（ビフォー・アフター）			
記入者（ ）			
生徒氏名	月/日 活動場面	ビフォー（いつ・どうだった）	アフター（いつ・どうなった）
〇〇 〇〇	月 日（木） フィルター清掃	初めての作業 脚立に上れない・・・ だまって見ている	すぐには上れないが下で脚立を押さえる役割に責任をもって取り組む姿が見られてきた （上れる日が近いかも）
〇〇 〇〇	月 日（木） 高等部の床のクリーニング	やり初めどころ 「しんどい、疲れる・・・」 と言って作業がなかなか進まない	クリーニング班のリーダーを任せられて少しずつ集中して作業に取り組めてきている。「しんどい・・・」などはほとんど言わなくなった。
〇〇 〇〇	月 日（木） ボンベ倉庫の塗装	1学期の初め、 作業はするが、やりたい作業がない・・・と繰り返し返言していた。	2学期に入ってから、〇〇の作業やりたいと、担任にも発信するようになってきた。
・ ・ ・	月 日（木）	・ ・ ・	・ ・ ・

意欲につながる言葉かけや励ましにもつながると考える。

C 他学部とつながる学習活動を目指して

(a) 中学部とのコラボレーション授業

中学部の「生活」の授業からの依頼を受け、ペンキの塗り方を教えに行くメンバーを募集した。高等部としては「教える」という活動を通して、生徒が今までの経験で身に付けてきた知識や技能を違う場面で発揮するというねらいがあった。参加した4名の生徒は「中学部の生徒にうまく伝わるか」をキーワードに教材研究を進め、作業手順の説明や注意事項、作業の手本、中学部生徒の評価などに対し、自分の役割を果たすために取り組んだ(図28)。「伝える」役割を果たすために準備を進めてきた高等部の生徒であったが、当日は中学部の生徒が自分の話に目を輝かせて聞いてくれ、意欲的に作業に取り組んでくれたこと



図28 役割分担の相談をする高等部生徒

で、「伝える」だけでなく「教える」ことで得られる指導者としての喜びも肌で感じ取っていたよう思う。また、実技指導や評価をする活動においても、生徒自身の気付きや達成感が得られる場面となったと考える。これらは参加した生徒の記録用紙からも読み取る

表11 生徒の記録用紙より

<事前の記録用紙より(原文)>

- 高い所へぬる話をしました。分かったことは、一生けんめい相談したことです。
- ペンキを塗るのが楽しかった。来週の指導でしっかり大きな声で説明できるようにがんばりたいです。
- ちゃんと説明してあげることが大事だと思いました。中学部の分かるように説明してあげたいです。でも、何とかがんばればうまく伝えられるかもしれないです。がんばります。
- 本番の時に緊張せずに正しく中学部に伝えたいです。
- 中学部にペンキ塗りを教える準備とかをしました。やっぱペンキ塗りすごく楽しいです。中学部に教えるためにはまず、塗り方とかマスキングとかを先にやって(筆者注:事前に自分がやってみて)、どうやって教えれば中学部さんに伝わるかなって復習(筆者注:予習のこと)をして、本番の時にうまく伝わったらよいですようって願っておきます。

<事後の記録用紙より(原文)>

- ローラーで高い所にペンキを塗って、中学部の生徒がペンキを塗れているか確認しました。
- 中学部のペンキ塗りをしました。楽しかったです。
- 中学部の生徒に成績を付けるのがちょっと難しいことが、気付いたことです。
- 中学部の生徒が一生けんめい話を聞いてくれて、給食室前の柱をきれいに塗ってくれてとてもうれしかったです。
- 説明の練習をしていたので緊張せずに説明しました。中学部にペンキのぬり方を教えるのって楽しいって思いました。中学部のみんなが楽しくペンキを塗ってくれたことが、私すごくうれしく思いました。楽しい一日でした。

ことができた(表11)。高等部と中学部のそれぞれの生徒が、違う立場で役割を果たそうとする場面となったことは、今回のコラボレーション授業の大きなメリットであったと感じた。

(b) 意欲から、自分らしい役割の果たし方へ

他の人と会話したり意思疎通したりすることが苦手な男子生徒が、中学部とのコラボレーション授業に進んで応募した。当日は大勢の人の前で堂々とペンキ塗りの手本を見せることができた。人に教えたり準備したりすることは苦手だが、意欲のあることを生かして主体的に行動することで、指導者としての役割を果たすことができ、皆に認められた場面

であった。教職員が「できたかどうか」だけでなく、生徒自身がその仕事（作業）のどこに魅力を感じているのかを感じ取る意識をもって指導や支援を行うことで、それぞれの生徒が作業に向き合う姿勢を理解することにつながり、生徒の主体性を生かすことで認められる場面につながられると感じた。

(c) 「もっとやりたい」を支える学部間連携

ある中学部の生徒は、「メンテナンス」の授業に体験学習で参加して以来、この授業に対する関心と憧れが更に高まった。その後、在籍する学級担任からの相談を受け、「メンテナンス」の作業に関わる課題と自立活動の課題を組み合わせ、授業の塗装作業で使った刷毛やローラーを、彼が中学部の教室へ持ち帰り、洗浄と乾燥を行った後、高等部の教職員や先輩に届けるという一連の作業を提案した。彼の自立活動の課題は言語表現やコミュニケーションに関するものであったため、実際の洗浄作業以外に「取りに行く、届ける、報告する」活動を取り入れた。評価は高等部の教職員や先輩が行い、中学部の学級担任に返すことにした。毎週月曜日には、専用の報告書とこれ以上ないほどきれいに仕上がった刷毛やローラーが届く。その刷毛やローラーは、毎週のように高等部の授業で使われ、それを再び彼が引き取りに来る。そのときの挨拶や言葉遣いは回を重ねるごとに力強くなってきているように感じる。

(イ) 成果と課題

a 意欲につながる取組から

上述のエピソードや「変化のきざしシート」及び「授業記録」などから、指導者として生徒の変容を読み取ることができた。また、依頼者へ「メンテナンスの授業づくりに関するアンケート」(回収数19)

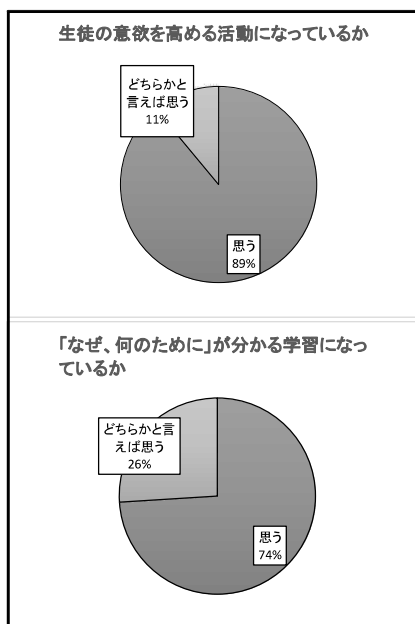


図29 授業に対する評価

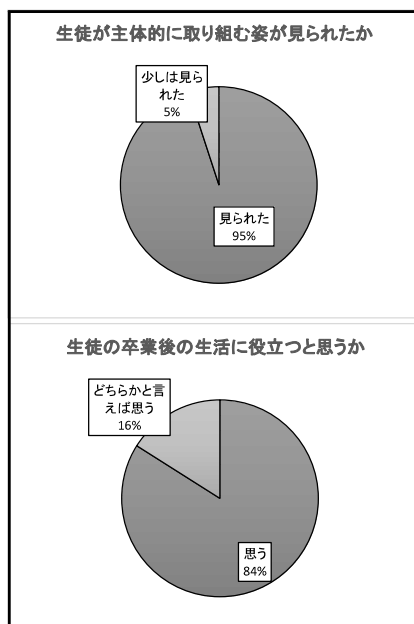


図30 生徒に対する評価

を実施し、授業に対する評価（図29）と生徒に対する評価（図30）の回答とともに、多くの感想や意見を得た（図31）。これらの感想などからも、多くの場面で意欲をもって主体的に活動する生徒の姿を知ることができた。特に、納品作業を通して、授業担当教職員以外の様々な立場の人と関わることで、自己肯定感や自信を高め、自分の課題をしっかりと意識することができたと考える。「納品書」は高等部の他の授業でも卒業後の生活を意識した取組として活用してもらうことができ、「メンテナンス」を担当する教職員をはじめ、学部を越えた多くの教職員などと連携しながら生徒に関われたことは、卒業後の生活につながる授業の在り方について共に考える機会となったと感じている。

② その他 (授業づくりや生徒の姿についての感想やアドバイスなど、ご意見をお聞かせください)

○ 学校の中で、様々な気持ちから、"皆の役に立つ^{メリット}作業"として頂いている事は、子供たちのスキル・経験に「なっていると感じます。
 (将来に向けての貴重な)

○ もっともっと「ありがとう」も伝えたいな という気持ちがあります。

特別
Aさん
1229
○ 中野部や高野部へのアドバイス生徒へのことは、中学時代の姿見or心で成長し続けることに感じたと
 ともうこれにありたい。もちろん知識は大切。その知識をどう活かすかという点に
 かなりこだわりたい。特に、和服の時にはふと真実な表情で、伝えている姿が
 ありました。授業や入試などの電子交換の時、必要なことのみ伝えもって
 仕事や遊びのメリハリが、子供たちの夢をサポートしている。

実際はよく違いはあるが、共通して感じるのは、第三者の目から見て(気付いていない?)
 いる)こと。生徒たちの成長にたいしてはよく思っている。実際、作業の進行時に「〇〇が
 喜ぶからかな」と話している生徒がいる。また、下ネタやアドバイス、自らの経験や知識を
 見聞しよくと意識する生徒もいる。

普段見ている顔と違う姿を見ることができ、とらえられたか一審の感想です。それをみんな
 人達の特性に応じた作業で、より自分の技能を高めていると見てきたことではと感じると、不得
 意な作業やチームワークが必要な時、消極的な姿勢や気にはなりました。
 もう少し、お互い、声をかけて、作業を進めると、よりやりやすくなるかな...と見てきました。
 時期をよりにか願っています。

・ 頑張り作業とある字に、本当に感動しました。そして、想像以上の仕上がりにおどろきました。
 先生方の~~指導~~生徒への指導も、勉強になりました。
 皆の作業はよく、そして、作業的...という気持ちにふさわしい。声かけは、私達も物に気づかれないように
 しながら、「お疲れ」や「お疲れ」や「仕事」として、お疲れしたいと思ったり
 したいお疲れします。
 ・ 仕事を頑張りたい時の連絡方法等を教えてください。

地道な作業やコツのいる機械・道具の扱いに真剣に取り組む
 生徒たちの表情や姿勢に感動して、毎回思わず見入ってしまいました。
 会話の中では普段の言葉づかいがでてしまうこともありましたが、作業の
 面では「ここがあかん!やり直したい」「〜の作業もしたい」といったような
 プログラム意識とも呼べるような責任感も感じられ、生徒たちが持っている潜在能力や
 ご協力ありがとうございました。 授業担当: 高等部 平井文章
 成長のパワーを多く見ることができました。これからもよろしくお願いします。

図31 アンケートの「その他」の内容 (抽出)

b 現場実習とつなげる取組から

ふり返しシートは、全ての学年の事後学習や進路学習で活用することができた。このこと
 によって、生徒が少しずつではあるが自分の将来の希望や今の課題を捉えて発信すること
 につながっていると思われる。この発信を授業の学習場面と関連させることは、生徒が

学習活動に前向きに取り組んだり、自分の役割をしっかりと果たそうとしたりする主体的な活動につながると思われる。また、事後学習の一覧表が全ての学年の廊下に掲示された(図32)。これらは、各学年や学級の教職員の事後学習や進路学習に対する意識が向上したことの現れであると考えられ、多くの教職員が生徒の発信を受け止めることにつながっていると考える。



図32 各学年の実習の振り返りの一覧表

c 他学部とつなげる取組から

中学部とのコラボレーション授業では、「教える」という立場で授業に参加したことで、「相手(中学部生徒)の立場に立って物事を考える機会になる」、「教材研究を通して、自ら考えて工夫する姿勢を高めることにつながる」、「事前に模擬授業などを行うことで自信をもって新しいことにチャレンジする機会となる」など、高等部の生徒が自ら力を伸ばしていくことができる機会となった。それと同時に、自分の作業経験の中から習得した知識や技能を「教える」という活動を通して発揮できたことで、多くの人に認められる場面となり、習得したものを定着させる機会にもなった。このような場面を通して、一人一人の生徒が、自分の役割の果たし方を実感すると共に自尊感情を高めることにつながったと考える。連携によるもう一つのメリットは、今後の授業づくりにおいて、お互いの学部の生徒の育ちを意識することができることが挙げられる。指導者が学習内容やねらいを考えると、他学部の3年間と自分が担当する学部の3年間をつなげて意識できることは生徒の学びを一貫して支えることにつながっていくはずである。

d 今後に向けて

授業では、生徒同士が互いを意識し声をかけながら作業する場面や、苦手なことや新しいことへチャレンジする場面も更に取り入れていきたいと考えている。そしてそれらの学習活動の一つ一つをキャリア教育の視点で見直すことを続けていきたい。また、他の授業とも連携を強め、学部全体で、「生徒の卒業後の生活につながる授業づくり」に取り組むことが必要であると感じている。次に、実習と授業のつながりについては、学部全体で共通理解を深めながら進めることが大切であると考え。その中で、学級での事後学習と多くの授業とがつながることで、生徒が自分の将来を意識し、より主体的に学習活動につながっていきけるのではないかと思う。最後に、学部間の連携については、教育課程の中での位置付けなどを含め、他の取組への広がりも課題である。今回の研究事例を実践の一例として学校全体に発信し、様々な視点から学部を越えた実践と連携のアイデアを探っていくことが大切ではないだろうか。

エ おわりに

中学部、高等部のそれぞれでキャリア教育の視点を取り入れた授業改善に取り組むことに

よって、生徒の意欲が高まり、主体的に活動する場面につながった。これらの取組を進める中で、教職員の授業改善に対する意識も高まったと強く感じている。

また、中学部と高等部が同じ視点を持ち、それぞれが授業づくりを進めることで、コラボレーション授業を実現することができ、学部間の連携のきっかけの一つともなった。この授業では、それぞれの学部の生徒が自分の立場や役割を理解して主体的に活動するとともに、その関わりの中から自分らしさや自己肯定感を得ることができたと考える。その結果、学校全体に学部間連携の具体的な形を示すことができ、キャリア教育の視点を取り入れた授業の在り方や「ゆるやかな一貫性」を目指した授業の在り方について発信することができた。

今後はこれらの成果を生かして、キャリア教育の視点を取り入れた授業改善を継続しつつ、さらにその有用性を学校全体に発信していきたい。また、学部間連携や系統性のある学習内容などについて検討を進めることで、教職員間の共通理解を深め、卒業後の生活につながる授業について具体的な話し合いを重ねていきたい。

(3) 奈良西養護学校 高等部における取組

奈良西養護学校は、開校6年目を迎えた知的障害特別支援学校である。現在は「10年目を目指して」という学校経営テーマの下、日々教育実践に取り組んでいる。平成24年度からは教育課程検討委員会が設けられ、教育課程の見直しを行っている。また、高等部では、開校2年目に有志が集まり、「高等部で足りないこと」や「高等部をよくする」というテーマで話し合い、出された課題を関係する学部内の校務分掌組織に伝えた。特に高等部の教育課程に関する課題については、翌年に「高等部教育課程検討委員会作業部会」（以下「高等部作業部会」という。）が学部内に組織され、本格的に教育課程の再検討がスタートした。高等部作業部会は、教務部、研究部、進路指導部などの関係する校務分掌の部員が構成メンバーとなったが、学部内の教職員全員が関わることができるように、これらの分掌にかかわらず多くの教職員に参加が呼びかけられた。

このように組織された高等部作業部会では、高等部教育目標の再検討とその具体化を目指し協議を重ねた。また、教育目標を常に意識できるように合言葉となるものを考え、「自分からすすんで働き、社会の中でいきいきと生きる」を高等部教職員全員で確認した。この合言葉は、まさにキャリア教育の定義と一致するものであり、この合言葉の具現化を目指すことがキャリア教育を推進することになると考える。そして、この合言葉を具現化する授業や教育課程について検討を重ね、平成24年度から「生活単元学習の試行」、「学習内容の整理」、「しごと（専門教科「工業」「農業」「家政）」の授業の見直し」を行うこととなった。平成25年度は卒業後と大きく関わりのある「しごと」の授業を領域・教科を合わせた指導形態である「作業学習」として捉え直し、試行した。

「作業学習」は卒業後の生活や現場実習との関連が大きい。「なぜ」「なんのために」それぞれの活動を行い、そして卒業後の生活に確かにつなげていくために必要なことは何かということを問い直し、キャリア教育の視点での授業づくり、現場実習と授業とのつながり、地域社会とのつながりに焦点を当てて取組を進めた。

ア 研究内容

(7) 「作業学習」の導入と授業づくり

a 「作業学習」導入までの経過

高等部作業部会では、生徒の卒業後の課題として「就労しても続かない。」「なんのた

めに作業をしているか分からないままになっている。」など、働く意識や働くことに対する意欲が低いということが挙げられた。

また、昨年度まで行っていた「しごと」は、発達課題別に複数のグループを編成し、農園芸や紙すきなどの物づくりを中心とした授業であった。しかし、昨年度実施した「しごと」の研究授業の研究協議などにおいて、「“作品づくり”ではない“製品づくり”が必要である。」「専門教科の目標として実施するには、生徒の実態に合わない。」などの意見が出された。さらに、現場実習の課題においては「挨拶ができない。」「商品を作っているという意識が低い。」「働くことの意味を理解できていない。」などが挙げられた。つまり、卒業後の生活を見据えた授業として、「しごと」の授業を行ってきたが、卒業後につなぐという目的を達成できていなかったのではないかとということが明らかになってきたのである。そこで高等部作業部会では、これらの課題解決を目指すためには、以下のことを大切にして取組を進める必要があると確認した（表12）。

これらを大切にした授業を考えたとき、これまで専門教科として捉えてきた「しごと」

表12 卒業後を見据え、授業づくりで大切にすること

<ul style="list-style-type: none"> ・働く意欲を高める ・働く態度を身に付ける ・いくつかの工程に分かれて、一つの物を作る ・分業制で行い、一人一人が自分の役割を担う ・卒業後の生活を想定し、全日作業の日などを設定し、卒業後の生活を想定した授業設定をする ・販売を目標に製品づくりを行う ・進路学習と連携し、学年進行で授業を行う ・集団編成は、発達課題別編成ではなく、様々な実態の生徒で編成をする ・生徒同士の関わりや認め合いの場面を大切にする ・やらされる作業ではなく、生徒が主体的に取り組むことができる作業を目指す など

を、領域・教科を合わせた指導形態である「作業学習」として捉え直し授業づくりを行うことが、卒業後の生活へのスムーズな移行を目指す上で必要なのではないかと結論づけ試行することとなった。

b 「作業学習」の授業づくり

これまでは「しごと」（専門教科）として物づくりを中心とした授業実践を行ってきたが、「作業学習」として授業を行うのは本校では初めての試みである。このため、研究部では昨年度までの「しごと」の授業の反省を踏まえ、

表13 高等部の作業学習で目指すところ、生徒に付けたい力

作業学習について	
研究部	
◇高等部の作業学習で目指すところ（生徒に伝えたいところ）	<ul style="list-style-type: none"> ①どのような実態の生徒にも、それぞれの「役割」や彼らの行ったことの意味が大切にされること ②取組の中で生徒がもてる力を発揮し、一人一人が生きて学習の場であること ③社会生活の中で有効に活用される実用的でより質の高い製品を目指し、社会や人とのつながりを生み出す
◇生徒に付けたい力	<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人がそれぞれの役割を担い、責任をもって最後まで取り組む ○自分の好きなこと、得意なことを活かし（適材適所）、<u>自主的に</u>作業に向かう ○自分でやること、作った物が分かり、作業に見通しをもって取り組む ○「おもしろい」、「頑張った」と実感し、達成感を味わう ○それぞれのよい所、頑張った所を認め合い、自己肯定感を高める

「高等部の作業学習で目指すところ、生徒に付きたい力」(表13)を作成したり、『作業学習指導の手引(改訂版)』(文部省、平成7年)から抜粋したものを教職員へ配布したり、学部教職員全員で授業づくりの要点を確認した。しかし、授業実践を進めていく中で、どのように授業を行えばよいのか分からないことが多く出てきた。そこで、各作業班の授業で大切にしていることを各作業班担当教職員グループで協議し、そこで出された意見を学部内で共有した。また、出された意見は研究部で「作業学習 授業づくりの観点 意見集約一覧」(表14)(以下「授業づくりの観点」という。)にまとめた。これを基

表14 作業学習 授業づくりの観点 意見集約一覧

作業学習 授業づくりの観点 意見集約一覧
<input type="checkbox"/> 一つの教室で様々な工程の作業をしているとき、全体を見渡すことができ、作業の流れが分かるような工夫をしているか
<input type="checkbox"/> 作業工程の中で、個々の生徒にどの工程を担っているのかを明確に示せているか
<input type="checkbox"/> 教室の環境設定は、分かりやすく、動きやすい動線ができていますか
<input type="checkbox"/> 静かに作業に取り組む雰囲気を作り出せているか
<input type="checkbox"/> 「みんなで一つの物を作っている」という意識をもたせるような工夫をしているか
<input type="checkbox"/> 生徒の得意な作業が準備されているか
<input type="checkbox"/> 適材適所(生徒のよさ、得意なことを生かす)の作業分担ができていますか
<input type="checkbox"/> 一つ一つの作業が分かりやすい作業になっているか
<input type="checkbox"/> 「少し頑張ればできる」ようなスモールステップの目標設定がされているか
<input type="checkbox"/> 一人で取り組めるように、個に応じた支援具を用意できているか
<input type="checkbox"/> 一人一人が作業を落ち着いて、丁寧に取り組めるような環境設定ができていますか
<input type="checkbox"/> 教職員が生徒の適切なモデルとなっているか
<input type="checkbox"/> 一日の作業の目標が明確に設定されているか
<input type="checkbox"/> 全体の作業の流れが分かりやすいように、工程ごとに作業スペースがいつも同じで決まっているか
<input type="checkbox"/> 道具や材料などの置き場所や片付ける場所がいつも同じところに決められているか
<input type="checkbox"/> 一日の成果や自分がやったことを生徒一人一人が発表できる場面があるか
<input type="checkbox"/> 頑張ったことに対して友達や教職員との共感できる場面を設定しているか
<input type="checkbox"/> 授業の始めに生徒が自分で(もしくは、教職員と一緒に相談しながら)その時間の目標設定をしているか
<input type="checkbox"/> 作業の成果が具体的な数、量として見える工夫をしているか(作業日誌への記録など)
<input type="checkbox"/> 作業を通して、生徒一人一人が「達成感」を感じることができているか
<input type="checkbox"/> 生徒に「やらされ感」はないか
<input type="checkbox"/> 生徒自身が「おもしろい」と思っ作業に取り組んでいるか
<input type="checkbox"/> 適切な作業量が用意されているか
<input type="checkbox"/> 自己評価(個人の振り返り)ができるもの(作業日誌など)が用意されているか
<input type="checkbox"/> 授業の終わりに作業班もしくは工程担当グループなどで、活動を振り返る時間が設けられているか
<input type="checkbox"/> 友達の間を認め合う雰囲気作りをしているか
<input type="checkbox"/> 休憩時間の過ごし方が分からない生徒への支援がされているか
<input type="checkbox"/> 「販売」(作ったものが人の手に渡る)ということを意識できるような手立てを講じているか

にして、主担当者が授業を考え、各作業班担当教職員で話し合い、作業環境の設定や生徒同士のやりとりの場面設定などを具体的に実現した作業班もあった。

また、1学期末の授業の反省で授業づくりの観点を使用した作業班では、その観点に沿って反省したことで作業担当教職員が共通した観点で話し合うことができ、2学期からの授業づくりや授業改善につながる取組になったと考える。

c 「作業学習」の研究授業

「作業学習」の研究授業は、高等部2年生で1回(10月:販売学習前)、高等部1年生で1回(11月:販売学習後)の計2回行った。参観及び研究協議は、高等部の教職員については、少しの時間でもできるだけ参観し、全員が研究協議に参加するという形をとり、他学部の教職員については希望制とした。

2年生の授業で作業へ主体的に向き合うために大切にされたことは、以下のとおりである(表15)。

研究協議では、「環境設定がしっかりなされていた。」「生徒が自分の仕事という自覚を

表15 作業に主体的に向き合うために大切にしたこと

- ・生徒一人ずつの役割があり、取り組んだことの成果や意味を大切にしている
- ・発達課題の異なる生徒や様々な生活上の課題をもつ生徒が学年という一つの集団の中で共に学び合っていることを意識できるような生徒同士のやりとりの場面を設ける
- ・生徒自身が自分の得意な作業を考えたり、繰り返し取り組む中で教職員と相談しながら自分に向いている作業を見付けたりすることができる
- ・作業への見通しをもったり、自信をもって取り組むために自分に合った作業を見付けたりする
- ・準備から片付けまで生徒自身が一人で行えるようにする など

もって作業しているように見えた。」「子ども同士のやりとりがあまり見られない。」「作業活動の評価の観点がない。」などの意見が出された。つまり、「作業学習」における環境設定については、生徒がすべき作業が分かりやすい形で提示されていたり、作業班全体が見渡せ、工程間のつながりが分かるように教室空間が工夫されていたりする(図33)など、一定の成果が見られ、生徒同士のやりとりが少ないことや作業に目的意識をもって取り組むための手立てなどに課題が残っているということである。

これらを踏まえ、また、自ら進んで作業に取り組む姿や、生徒自身が活動の意味が分かり自ら目標をもって取り組むことを目指し、2回目の研究授業を行った。

2回目の研究授業で大切にされたことは表16の3点である。



図33 教室空間の工夫

表16 2回目の研究授業で大切にされたこと

- ・作業活動に自ら取り組む姿を目指し、やりたい作業の選択場面を設定した
- ・自分の役割が友達に認められる場面や作業を友達に依頼する場面を設定し、友達同士のやりとりを多くした
- ・また、一人一人の役割が達成されて初めて一つの製品が出来上がるように作業工程を工夫した

はぎれを材料としたマットづくりの授業の中で、織り担当の生徒と染色担当の生徒間で、授業の始まりに染色担当は織り担当から色のリクエストを受けた。染色担当がある程度作業を終えたところで、「この色でいいですか。」と織り担当へ確認を求めると、織り担当から「もう少し色を濃くしてください。」と再度依頼があった。どのように対応するのか黙って見ていると、染色担当は相談後、協力して染色を行い、織り担当へ確認をするというやりとりを何度か行った(図34)。こうして一つの布(材料)が出来上がったのであるが、織り担当の生徒は自分の好みの色に染まった布を見て、とてもうれしそうな表情を見せた。また、染色担当の生徒もリクエストどおりに染められたことと、何より織り担当の生徒の

「これでいいですよ。」という言葉によって、自分の仕事が認められたことに満足げな表情を見せたことが印象的であった。また、その後、織り担当の生徒は、あらかじめ色や模様の付いた材料をあまり使わず、染色担当が染めた材料を多く使うようになったのである。これは担当者間での信頼関係が生まれた結果からだろう。

このようなやりとりを重要視したことで、作業に対するお互いのモチベーションが上がり、特に染色担当の生徒の自信へとつながった。さらに、担当者間でのやりとりについて作業している全員に知らせ、一人一人がただ作業を行うだけでなく、それぞれの工程の経過が分かり作業担当全員で一つの物を作っているという意識の再確認へつなげた。

研究協議では、「子ども同士のやりとりがあって、そのやりとりが一人一人の作業への意欲につながっていると感じた。」

「作業をやらされている感じがなく、自分の作業として取り組んでいる。」などの意見が出され、前回の研究協議における課題点は一定克服することができたと考える。更なる課題としては、「作業学習の評価表の必要性」、「作業学習の3年間のおさえ」、「作業学習と



図34 担当生徒同士のやりとり

表17 作業学習 評価の観点表

作業学習 評価の観点表(奈良西版)	
	評価項目
身だしなみ 体調管理など	自分の体調が分かり、活動することができる
	睡眠や食事など規則正しい生活を送ることができる
	爪を短くし、手を清潔にしている
	ハンカチを常に携帯している
	頭髪を整えている
	ひげを剃っている(男子生徒)
	気候に合った服装をしている
挨拶 報告 言葉遣いなど	挨拶を自分から行うことができる
	丁寧な言葉遣いで話することができる
	作業を終えると、自分から報告することができる
	相手の顔を見て、話や説明をしっかりと聞くことができる
	分からない時は、教師に聞いたり、助けを求めたりできる
	時間を守って行動することができる
作業力 作業態度など	整理整頓ができる
	準備・片付けができる
	一定時間集中して取り組むことができる
	一定時間継続して取り組む体力がある
	任された仕事分かり、最後まで行うことができる
	作業工程を理解して、作業を進めることができる
	ミスなく、正確に作業ができる
	友達と協力して作業ができる
	自分の目標を意識して作業に取り組むことができる
	自分の一日の作業を振り返ることができる
	道具などを正しく使うことができる
	材料の扱い方が分かる
	安全に気をつけて作業をすることができる
	指示を守って作業ができる
自分から進んで作業に取り組むことができる	
休憩時間の過ごし方が分かる	

進路学習との関連」などの意見が出された。

確かに、これまで、作業に対する生徒の意欲や主体性などについて重点的に取り組んできた反面、「作業学習で付けたい力とは何か」について議論を重ねることができていなかった。各作業班ではそれぞれ考えていたとは思いますが、学部としては明確にもつことができないまま約半年が経過していた。そこで、研究部が中心となって「作業学習 評価の観点表」を作成した(表17)。しかし、まだ十分に学部内で議論をしていないので、これを原案として、今後、試用しながら、「作業学習」で生徒に付けたい力を明らかにしていきたい。

(4) 「作業学習」と現場実習をつなげる取組

本校では高等部2年生及び3年生の夏期休業中を中心に現場実習に取り組んでいる。しかし、現場実習と日々の授業とのつながりが希薄で、夏期休業中の進路に関するいわゆるイベントのように捉えられているのではないかという課題があった。

そこで、授業と現場実習をつなぐ試みとして、今まで使っていた現場実習評価表(以下「評価表」という。)を進路指導部と研究部が連携して改良し、新書式の提案を行った(図35)。これまでの評価表は現場実習の目標のみが記入され、現場実習実施後、生徒の様子とその課題を書くものであった。新書式では「作業学習」の目標も併記し、現場実習中も「作業学習」の課題を教職員が意識して指導できるようにし、また現場実習の課題を

「作業学習」の指導に生かしていくことができるようにした。

新書式の使用については、まず、現場実習へ行く前に学級担任が「作業学習の目標」を個

現場実習 個人評価表		高等部 ○年 ○組 A
作業学習でのねらい・目標、大事にしてきたこと		
<ul style="list-style-type: none"> 作業の全工程の中で自分のやる事が分かって最後まで責任をもって取り組む。 物を作る喜びを感じ、作業や現場実習に対する自信をもつ。 その日の活動について、作業日誌を書くことで振り返ったり、教職員と話し合ったりすることで自分自身を知る。 		
現場実習の概要		「作業学習」の目標を個別の指導計画から評価表に転記
実習先①		
場所	B	
期間	(H25)年(7)月(25)日 ~ (H25)年(7)月(26)日 (2)日間	
通勤方法	保護者送迎(車、公共交通機関)、事業所バス、単独通学(保護者引率、単独、教職員引率) 【1日目】送迎 【2日目】単独通学(徒歩)	
作業内容	【1日目】パン工房(ラスク、クッキー作り→パンを切る、計量、生地形成、ラッピング等)	
実習先①: B		
現場実習の目標・ねらい		生徒氏名: <input type="text"/>
現場実習の目標を記入		
<ul style="list-style-type: none"> 初めての場所で様々な人との関わりや作業などを体験する。 自分のやる事が分かって最後まで責任をもって取り組む。 実習(作業)中の適切な態度や言葉遣いなどについて、自分の行動を振り返りながら教職員と話をすることで考える。また、適切な行動を考え、実行する。 		
現場実習での生徒の様子・課題		
1日目: パン工房 スタッフの方の話をよく聞き、教えてもらった通りに確実に仕事をすることができる。計量では、デジタル表示の量りを使用。数字が表示される窓が大小2通りあったが、やはり表示が小さい方は見えにくかったようで、途中、自分で気づき、大きい表示のものを使用。バター、小麦粉、砂糖		
現場実習後、「作業学習」の目標やねらいに対する課題を記入		生徒氏名: <input type="text"/>
作業学習の目標・ねらいに対する課題		
<ul style="list-style-type: none"> 学校生活の様々な場面で、適切な態度や言葉遣いなどについて、教職員と話をするなどして自分の行動を振り返り、自分自身を正しく理解すること。また、適切な行動を考えて実行すること。 		
2学期以降、今後、作業学習でどのように取り組んでいくか。		2学期からの「作業学習」での指導の手立てを記入
<ul style="list-style-type: none"> 地域ふれあい文化交流会、高等部文化祭など、教職員以外の人と関わる機会を増やす。 失敗したときや困ったときの「相談」の場面を意識的に設定し、具体的な場面を通じて適切な行動について学ぶことができるようにする。 		

図35 現場実習評価表 新書式の使用について

別の指導計画から評価表に転記し、その目標を確認する。そして、それを踏まえ、現場実習での目標を考え、記入する。学級担任以外の教職員が引率する場合についても、事前に現場実習評価表の内容を確認するようにした。

現場実習が終わると、その様子及び課題を記入し、その課題に対して2学期の「作業学習」でどのように取り組んでいくか、目標及び手立てを記入した。

また、学級担任と「作業学習」担当教職員が集まり、記入された評価表を基に、その内容の確認と共通理解を図り、2学期からの「作業学習」に臨んだ。

昨年度と比較して、現場実習時の生徒の様子に大きな変容は感じられなかったものの、評価表の記入や評価表を使つての話合いを意識的に行ったことについては、生徒の課題を共通認識でき、授業に生かすことができたという意見が聞かれた。このことから少なからず、授業とのつながりを作ることができたと思う。今後、つながりを密にしていくためには教職員の意識を更に高めるようにしていく必要があると考える。

(ウ) 地域ふれあい文化交流会での販売活動

「作業学習」では、作品ではなく製品づくりを目指してきた。年2回の販売活動を「作業学習」の年間計画に組み込み、生徒はこの年2回の販売を目標に「作業学習」に取り組んできた。販売活動は、自分が作った製品が人の手に渡ること、相手から喜んでもらえ、また、実際に地域の人などと販売の場を通じてつながることができる。このような活動から、自分自身が必要とされていることや社会とのつながりを感じ、また、自分のやってきたことの意味を販売活動の経験を通して再確認し、より成就感を得ることができると考え取り組んだ。

1回目の販売活動は「地域ふれあい文化交流会」であった。地域の文化祭のような雰囲気、本校を会場に行われ、今年度で第5回となる。第3回は、高等部の生徒の希望者が学校紹介のチラシ配りや福祉サービス事業所の販売の手伝いなどを行った。第4回からは高等部全生徒が参加し、体育館で舞台発表を行ったり、福祉サービス事業所の販売補助などを行ったりした。

そして、第5回の今年度は、「作業学習」の製品を販売する「奈良西養護学校の店舗」を初出店した。この「地域ふれあい文化交流会」での販売活動を「地域の人々とのふれあいと交流の場」、「自分の作った物が人の手に渡ることを通して、働きがいややりがいを感じることができる場」として捉え、この経験を通して生徒が「作業学習」により主体的に向かうことができると考えた。また、普段は体験できない、身近な教職員や親ではない地域の方々に向けて販売することが社会参加への一つのステップであり、いつもとは違う緊張感をもって生徒が販売することができるのではないかと考えた。

当日は、大きな声でお客さんを呼び込んだり、自分からお客さんを誘導したりと生徒の自主的な姿がたくさん見られた。また、自分が作った製品の説明をしたり、製品のよい所をお客さんに伝えて売



図36 地域ふれあい文化交流会の様子

り込みを行ったりと、自分が作った製品を買って欲しいという意識がとても高く表れていたように思う（図36）。また、販売活動後、次回の販売に向けてどのようにすればもっと売れるのかということをも自分で考え、教職員に提案する生徒が現れたり、製品を作るスピードが上がったりするなど、2回目の販売に向けて「作業学習」に向き合う生徒の姿勢に変容が見られた。それは、売れる喜び、つまり、自分が作った物が喜ばれ、必要とされることを実感できたからだと考えている。

イ 成果

12月に、「作業学習の導入と授業づくり」、「作業学習と現場実習をつなげる取組」、「地域ふれあい文化交流会での取組」についてのアンケートを高等部教職員に実施した。回収率は67%であった。この結果を考察する。

まず、「作業学習の導入と授業づくり」では、「授業づくりの観点」（前掲表14）を高等部教職員全員で意見を出し合い研究部が作成した。これを用いることで「授業改善につながった」と及び「どちらかと言えばつながった」という回答が82%、生徒が「作業学習」に「主体的に取り組む姿につながった」と及び「どちらかと言えばつながった」という回答が63%であった（図37）。

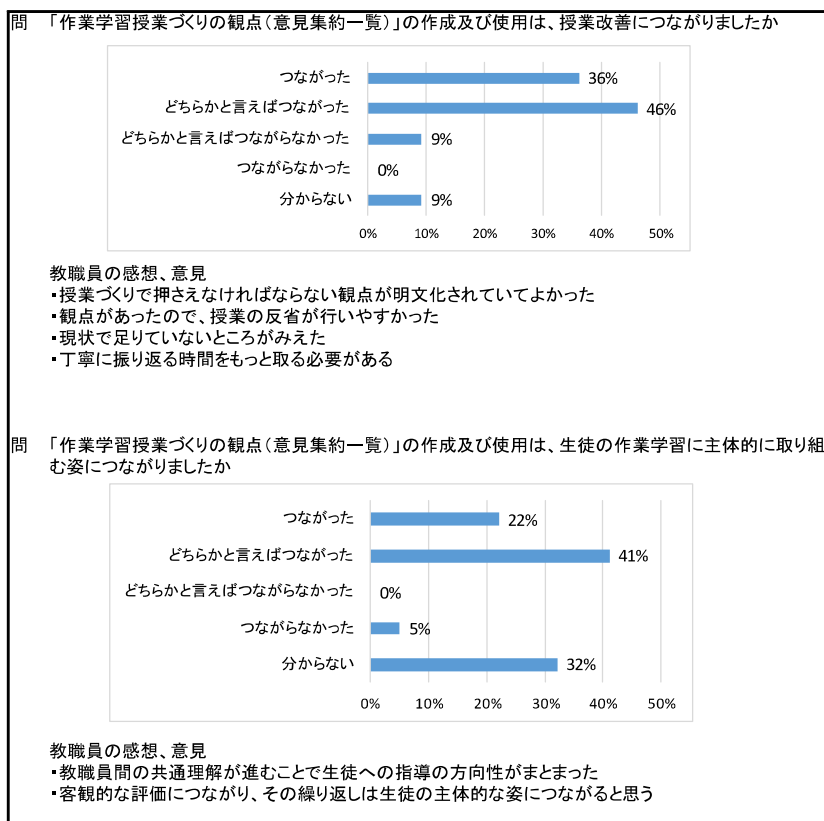


図37 「作業学習」の導入と授業づくりに関するアンケート結果

これらの結果から、「授業づくりの観点」を話し合いながら作成することや共通の観点で授業づくりをすることが共通理解につながり、生徒の主体的な姿につながるきっかけになると言える。

また、初めて「作業学習」の授業づくりに取り組んでいる高等部教職員にとって、研究授業は他の作業班の様子を知ることができる非常に貴重な機会となり、その意義は大きいものであった。また、研究対象とした作業班の授業から高等部全体の「作業学習」における課題を共通確認し、改善のために学部として同じ方向を目指して進むことができるよい機会となった。高等部教職員から、「今回の研究授業はとても参考になった。」という声が複数あり、高等部としての授業力を高める一助となったとも言えよう。

次に、「作業学習と現場実習をつなげる取組」では、現場実習時に明らかになった課題や反省を指導に生かすことについて「どちらかと言えばできた」という回答は50%で、つなげ

るという教職員の意識改革のきっかけにはなったが、まだまだ十分ではないことが明らかになった。また、「作業学習」時の目標を意識しながら現場実習時の指導ができたかという問いに対しては、「分からない」という回答が46%で、何をつなげていくべきなのか具体的に分からないという課題も顕在化した(図38)。

最後に、「地域ふれあい文化交流会での販売活動」であるが、アンケート結果は、図39のとおりである。生徒が主体的に「作業学習」に取り組む姿に「つながった」、「どちらかと言えばつながった」を合わせて72%の回答が得られた。感想、意見からも販売活動を設定したことは、目標をもって作業活動に取り組むことになり、また、自分が作った物が喜ばれ、必要とされている、役に立っているということを実感できる取組となったことが明らかであった。1回目の販売を終え、2回目に向けて、更にモチベーションが上がった生徒も現れ、販売活動を計画的に設定したことで、「作業学習」に向かう姿がより主体的になり、生徒のキャリア発達を促す有効な取組となったと考える。

これまでも高等部だからこそ「出口」がすぐそこにあり、卒業後を意識して、授業や生徒との関わりを考えてきた。しかし、3つの取組を合わせ、改めて「卒業後につながる授業」ということをキャリア教育の視点で見直していくことで、授業づくりの観点や評価の観点などの重要な要素を整理することができた。また、「しごと」の授業「作業学習」を導入し、

これまででも高等部だからこそ「出口」がすぐそこにあり、卒業後を意識して、授業や生徒との関わりを考えてきた。しかし、3つの取組を合わせ、改めて「卒業後につながる授業」ということをキャリア教育の視点で見直していくことで、授業づくりの観点や評価の観点などの重要な要素を整理することができた。また、「しごと」の授業「作業学習」を導入し、

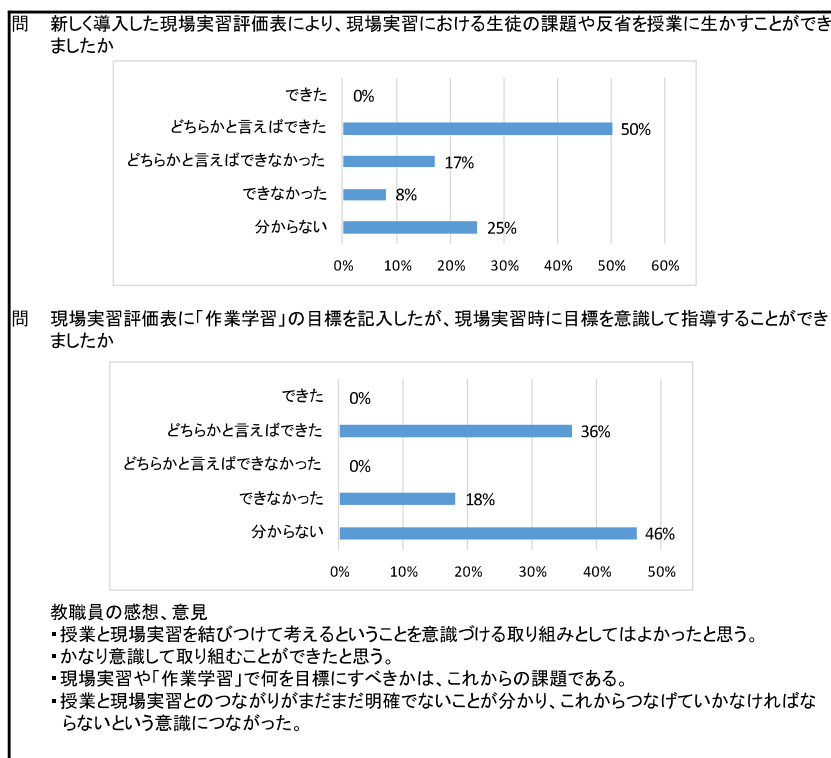


図38 「作業学習」と現場実習をつなげる取組に関するアンケート結果

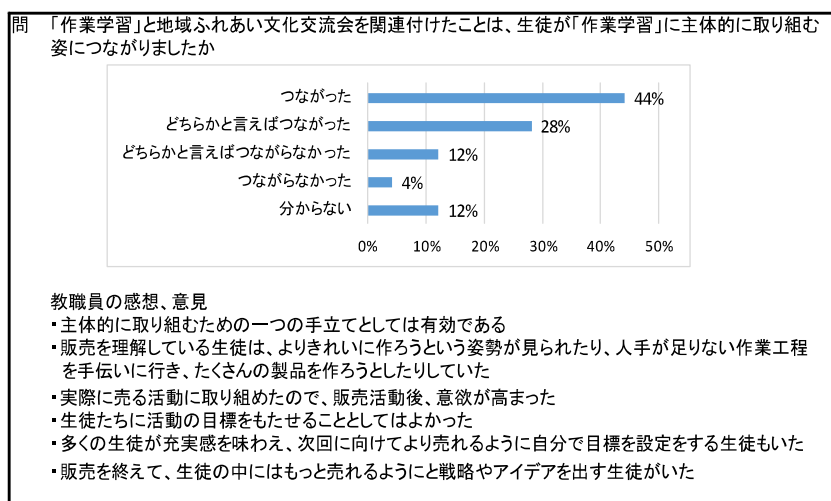


図39 地域ふれあい文化交流会での取組に関するアンケート結果

その授業づくりでは、本当の「働く力」につなげるために、「働く意欲」、「達成感」、「やりがい」、「自分で思考する」などの気持ちを育てることが重要であることを改めて確認することができた。また、生徒がどのように自ら進んで授業に向き合うのかというキャリア発達を促す取組の重要性とその効果が明らかになった。作業を行っている生徒の様子から、「作業をやらされている感じではなく、生き生きと主体的に作業を行っている姿」、「作業に自分から向かう姿勢」、「自分がやっているのだという自信」、「販売活動後の作業へのやりがい」がいかに大切なものであるかを改めて感じるとともに、我々の考える方向性は間違っていないことを確信し、来年度も「作業学習」として授業を行うことになっている。

「作業学習」の授業づくりをキャリア教育の視点を取り入れて行ったことで、高等部が目指す「自分からすすんで働き、社会の中でいきいきと生きる」という姿に少なからず近づけることができたと思う。さらに、卒業後へ確かにつなげるという命題に対して、しっかりと向き合わねばならないという教職員の意識に変容があったことも今回の取組の一つの成果として捉えることができると思う。

ウ 課題

今回の取組を振り返り、今後取り組むべき課題は3つであると考えている。まず、一つ目は、「作業学習」の高等部3年間の学習計画を作る必要性である。今年度は初めて「作業学習」に取り組んだので、系統性や学年のつながりを意識するまでには至らなかった。しかし、卒業後の生活を豊かに主体的に生きていくためにどのような力が必要であるのか、また、「作業学習」は学年単位で進めていることから、それをどのように3年間で身に付けていくのかを検討していく必要がある。また、進路指導とも関連するので、進路指導部や教務部などの関係する担当が集まり検討していかなければならない。

次に、キャリア教育の視点の他教科への広がりである。今年度はキャリア教育の視点を「作業学習」に取り入れて実践を行ったが、全ての教育活動及び指導場面で必要である。現在、その視点がどれだけ広がっているのかというと、「作業学習」以外の教科・領域では生徒の発達課題に合わせて学習グループを複数編成していることもあり、その広がりを把握することが難しい。しかし、生活単元学習と位置付けた高等部1年生の宿泊学習のように、ただ行くだけのイベントではなく、「なぜ」「なんのために行くのか」という宿泊学習の意味を担当の教職員集団で考え、生徒が主体的に取り組むことができるように協議を重ねたものもある。ここでは、生徒が取り組んだことが実際の生活へ返るようにと考え、教科別の学習と連携させて、宿泊施設までの地理的なことを調べる学習や日程表を作ったりした。また、事前学習一つをとっても教職員が全て説明をしてしまうのではなく、その教育活動の意味を問い直し、生徒自身の生活に学習成果としてどのように返るのかを考えるようにしたことで、宿泊学習では、これまでとは違い、生徒が自主的に活動する場面が多く見られるとともに、学習全体を通して教職員の生徒への働きかけが明確になったと感じた。

キャリア教育の視点を取り入れて「作業学習」の授業づくりに取り組んだことで、上記のように他の授業へ波及していているところもある。しかし、これからは全ての教育活動で、全ての教職員がキャリア教育の視点で教育活動を見直すことができればと思う。

三つ目に、他学部との連携である。高等部では、卒業を目前にして、社会参加に向けて「社会で生きるための力を付けたい」、「卒業が迫っている」と感じる。高等部の「作業学習」へのスムーズな移行を考えると中学部から主体的に向き合う意欲や気持ちを高めるための作

業活動などを行うことが必要ではないかと感じる。研究協議で中学部教職員から中学部の「しごと」の授業と高等部の「作業学習」との連携の必要性について意見が出されたが、これから中学部と高等部の連携について考えていかななくてはならない。

卒業後の生活を見据えた取り組みについては、高等部だけではなく、小学部、中学部を含む学校全体で考えなければならない。今までの成長の上に高等部教育があるので、学部間の連携、そして、12年間の教育として捉える教育課程を目指していきたい。

来年度も、今年度の反省や課題を踏まえて取組を継続し、更なる発展を目指していきたい。そして、高等部教育目標の合言葉、「自分からすすんで働き、社会の中でいきいきと生きる」を目指して実践に取り組んでいきたいと考えている。

5 研究結果と考察

大淀養護学校の研究は、中学部「生活」、高等部「メンテナンス」の授業を研究対象とし、生徒の活動一つ一つについて、「なぜ」「なんのために」「どのように」という問い直しをすることで、生徒が主体的に向き合うことを目指したキャリア発達を促す取組であった。また、いわゆる障害の程度が重い生徒たちを対象とした授業における新たな視点の発見や「ゆるやかな一貫性」というキーワードの下で実施された高等部と中学部のコラボレーション授業など、今後のキャリア教育推進の指針となる成果を上げることができた取組であったとも言える。

奈良西養護学校の研究は、今年度、新たに導入された「作業学習」の授業が研究対象であった。昨年度まで専門教科として「しごと」という授業が設定されていたが、この授業が卒業後の生活にどのようにつながるのかを再検討したところ「しごと」に替わり、領域・教科を合わせた「作業学習」を導入することになったという経緯がある。これは、キャリア教育は教育改革へつながるといふ本来的意義としての教育課程再編の動きの一つであったと言える。このような再編の最中に本研究を実施したことは、高等部としての「作業学習」の在り方及び生徒の主体的な姿を目指した授業の在り方についての組織的な検討を早めることとなり、「授業づくりの観点表」や「作業学習 評価の観点表」や「現場実習評価表」という様々なツールを生み出すに至った。

両校の取組を通して、キャリア教育の視点を取り入れて卒業後の生活につながる授業の在り方を考えたときに、以下の三点が明らかになったと考える。

一点目は、生徒の主体的な活動を引き出すための授業改善が図られたことである。知的障害のある生徒の卒業後の生活を考えたとき、やるべきことが分かって自ら自分の生活に向き合う力が求められる。この力は、学校では主体的に授業に向き合うことから育まれていくと考える。そのために教職員は、授業の一つ一つの活動が生徒にとってどのような意味や価値があるのかを深く考えた授業づくりを行う必要がある。そして、目標や内容が整理、焦点化された活動を生徒が積み重ねていくことによって、生徒自ら自分の生活に主体的に向き合うことができるようになり、卒業後の豊かな生活につながるのだと考える。この点において、奈良西養護学校から提示された様々なツールや大淀養護学校高等部の「メンテナンス」における発注と受注のシステム、プロから学ぶ取組、感謝される場面の設定、また、中学部の生徒が高等部の先輩から学ぶ取組などから、生徒の主体的な姿が現れたことは大いに評価できる。また、両校とも校内だけの活動で完結するのではなく、地域や社会との関わりやその中で認められる体験を目指していることは注目すべき点であり、更に主体性を引き出す取組として重要視したい。このよう

にキャリア教育の視点を取り入れることで授業改善が図られた結果、まだまだ生徒の主体性を引き出せることが明らかになった。

二点目に、学部間連携及び現場実習と授業との連携の方向性が示されたことである。これまでも各特別支援学校では、この課題解決に向けて様々な取組を行ってきたことは既知のことである。しかし、本研究でこれらについても模索したことは本県知的障害特別支援学校として実践の具体的なモデルを示すこととなり有意義であったと考えている。具体的には、大淀養護学校の中学部と高等部が連携して授業を企画実践した取組、大淀養護学校高等部の現場実習と授業とを関連付けた取組、そして、奈良西養護学校の現場実習評価表の活用などがこれに当たる。このように学部間連携及び現場実習と授業との連携という課題に対して本研究でスポットを当てて取り組むきっかけとなったのは、キャリア教育の視点を導入したからに他ならない。つまり、各特別支援学校が長く抱えるこの課題に対する解決の糸口を探るためにも、キャリア教育の視点は有効であったと言えよう。

最後に、教育活動を「なぜ」「なんのために」「どのように」と問い直すことは、生徒の主体的な姿を引き出すことにつながるのみならず、教職員の授業づくりなどに対する新たな視点の発見につながったということである。これは大淀養護学校中学部の授業改善の取組が、いわゆる障害の程度が重い生徒を対象とした授業の目的やねらいに新たな視点を追加したことや奈良西養護学校の現場実習評価表導入が教職員の現場実習指導時の意識に変容をもたらしたことなどからもうかがえる。教職員の意識に変容をもたらしたことは、今後の更なる授業改善や教育課程の再検討などにつながることを期待できると考える。

一方、今後の課題も浮かび上がった。まず、一点目に、キャリア教育の視点を他の教科などの教育活動全体へどのように広げるかということである。今回の研究では、両校とも取組の対象とした授業は、卒業後の生活を直接的にイメージすることが容易である高等部の授業や進路に関わる中学部の授業及び「作業学習」などであった。研究のテーマに「卒業後」、「キャリア教育」という言葉があったことも少なからず影響していると推測されるが、ともすれば「キャリア教育＝進路指導、職業教育」と狭義に捉えられかねない。しかし、今後は中核となるこれらの授業内容の充実を図りつつ、他の授業や全ての教育活動に取り入れられることを期待している。学部を越え、全ての教育活動にキャリア教育の視点を取り入れるためには今後更なる実践の積み重ねが必要となるであろう。

二点目は「本人の願い」を大切にするということである。菊地は、「本人の価値観や自己決定、将来展望が大きく関係する『本人の願い』はまさに『キャリア教育』の中核であると考えます」（菊地、2013）と述べている。生徒の主体性を引き出し、キャリア発達を促すためには「こうなりたい」「将来こんなことがしたい」という願いの実現を目指すことが重要である。そのためには、授業時の指導や支援を考えるとときに生徒一人一人の「願い」に寄り添った手立てを考えることや、生徒自身が「“自分の”願い」を意識することが重要であると考え。今回の取組では、大淀養護学校高等部の「メンテナンス」の授業で本人の願いを大切にしたい取組があったが、奈良西養護学校や大淀養護学校中学部の取組の中では大きく取り上げられていない。今後は「本人の願い」を汲み取り、その願いの実現を目指す教職員の創意工夫、そして、生徒自身が「“自分の”願い」として意識できることとそのための手立ての充実を目指していくことが求められるのではないかと考える。さらに、「願い」の実現については、学校だけでできる訳ではない。保護者との連携も考え、個別の教育支援計画を有効に活用していくことが

求められるのではないかと考える。

三点目は、小学部、中学部、高等部と12年間を見通した系統立った授業内容の検討である。大淀養護学校では、中学部と高等部のコラボレーションの授業が初めて試みられたが、これは一つの時間における単発的取組で、年間計画として組み込まれたものではなかった。また、奈良西養護学校でも中学部の「しごと」の授業などとの連携が課題として挙げられていた。このような学部間連携の視点や課題は、キャリア教育の視点を導入したことで改めてクローズアップされたと考える。今後、一つ一つの授業が次の学部のどの授業にどのようにつながっていくのか、また、各学部ではどこまでの力を付けることが求められるのかなどについて検討を重ね、学部間連携の在り方を探ることが必要ではないかと考える。そして、小中高12年間を通じた授業計画の立案や系統性のある授業内容を目指していかなければならないと考えている。

キャリア教育の視点を取り入れた授業改善を推進したことで多くの成果がもたらされたのは上述のとおりであり、今後、更なる広がりや充実を期待してやまない。

参考・引用文献

- (1) 菊地一文編著 (2012) 『特別支援教育充実のためのキャリア教育ケースブック事例から学ぶキャリア教育の考え方』 ジアース教育新社 はじめに
- (2) 菊地一文編著 (2013) 『実践キャリア教育の教科書特別支援教育をキャリア発達の視点で捉え直す』 学研教育出版 pp. 22-23、p. 28
- (3) 井上昌士、猪子秀太郎、工藤傑史、小澤至賢、菊地一文、涌井 恵、大崎博史 (2013) 『特別支援学校（知的障害）高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究－必要性の高い指導内容の検討－』 p. 7
- (4) 菊地一文 (2014) 「障害のある児童生徒に対するキャリア発達を支援する教育の意義と実践」(奈良県立教育研究所特別支援教育におけるキャリア教育研修講座資料)
- (5) 中央教育審議会 (平成23年) 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』 (答申) pp. 16-17
- (6) 尾崎祐三、菊地一文監修 (2013) 『知的障害特別支援学校のキャリア教育の手引き 実践編－小中高の系統性のある実践－』 (全国特別支援学校知的障害教育校長会編著) ジアース教育新社
- (7) 全国特別支援学校知的障害教育校長会編著 (2010) 『特別支援教育のための キャリア教育の手引き』 ジアース教育新社
- (8) 全日本特別支援教育研究連盟 (2013) 『特別支援教育研究』 第673号 東洋館出版社
- (9) 国立特別支援教育総合研究所 (2011) 『研究紀要第38巻』
http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub_a/a-38/a-38_all.pdf p. 35
- (10) 国立特別支援教育総合研究所編著 (平成23年) 『特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック』 ジアース教育新社
- (11) 独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 「就労支援のための訓練生用チェックリスト」
http://www.nivr.jeed.or.jp/download/kyouzai/kyouzai30_01.pdf
- (12) 「作業学習における評価観点表」 多摩北西部共通
www.hamura-sh.metro.tokyo.jp/pdf/hyouka_kanten_hyou.pdf

- (13) 文部省（平成7年）『作業学習指導の手引（改訂版）』東洋館出版社
- (14) 上岡一世（2013）『勤労観・職業観がアップする！キャリア教育を取り入れ特別支援教育の授業づくり』明治図書出版株式会社
- (15) 文部科学省（平成21年）『特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』教育出版株式会社
- (16) 文部科学省（平成21年）『特別支援学校学習指導要領解説総則等編（高等部）』海文堂出版株式会社